

国際理解教育と日系ブラジル人児童の教育（下）

寺 島 隆 吉
(岐阜大学教育学部)

河 田 素 子
(公立小学校教諭)

第4章 日系ブラジル人児童・生徒

- 1 日系ブラジル人児童・生徒の現状
- 2 ブラジルと日本の教育の違い
- 3 学校生活における日系ブラジル人児童・生徒の矛盾・軋轢

第5章 教育現場での取り組み

- 1 大垣市立西小学校 「日本語学級」
- 2 岐阜市立黒野小学校 「アミーゴ」
- 3 豊田市立東保見小学校 「ことばの教室」
- 4 ブラジル政府認定ブラジル人学校 「HIRO学園」

終章 取り組みの比較と今後の展望

参考文献（以上が「下」、以下は「上」）

序章 在日外国人と国際理解教育

第1章 デカセギをめぐる状況とその変化

- 1 外国人登録者数の推移
- 2 出入国ブラジル人の推移
- 3 日系ブラジル人の雇用の変化

第2章 日系ブラジル人の就労と生活実態

- 1 デカセギの就労の実態
- 2 ブラジル人の立場から見た、ブラジル人労働者の生活と就労の実態
- 3 日本人の立場から見た、ブラジル人労働者の生活と就労の実態

第3章 日系ブラジル人集住地

- 1 岐阜、そして全国のブラジル人集住地
- 2 ブラジル人と日本人の間にかかるトラブル
- 3 地域における交流と共生の試み

(以上までが「上」)

はじめに

「国際理解教育と日系ブラジル人児童の教育」(上)では主として以下のことを述べた。

1990年の入管法(出入国管理及び難民認定法)改正で外国籍の日系2世, 3世にも「日本人の配偶者等」, 「定住者」という在留資格が与えられたことにより, 日本における日系外国人労働者が急増した。それに伴い家族の呼び寄せや当初からの家族ぐるみの来日が多くなり, 15歳未満の日本における義務教育期間の学齢期の子ども数が顕著に目立つようになった。岐阜県でも美濃加茂市, 可児市, 大垣市にそれぞれ全市民の約4%~7%弱をブラジル人が占めており, 大垣市においては約170人の日系ブラジル人児童生徒(全児童生徒の約1.3%)が公立の小中学校に在籍している。

この研究では, 「外国人児童」一般ではなく「ブラジル人児童」に焦点を絞った。これはそれぞれ異なった文化を持つ子ども達を一括してとらえるのではなく, 日系外国人労働者家族の生活からその独自性を明らかにしていく必要があると感じたからである。日系ブラジル人労働者のように就労目的で日本に来た場合, 子どもの教育の重点を日本かブラジルどちらに置くのかによって, 子どもの教育に大きな影響が及んでくる。したがって, その仕事の特殊性や生活の実態がどのような形で子どもに影響しているのかを探った。具体的には, 日系ブラジル人についての章をもうけ, 彼らの現状や生活・就労の状況に加え, ブラジル人集住地における日本人住民との衝突など「愛知県保見団地」「大垣市」を例に詳しく述べた。

以下の章では, さらに子ども達が学校などで抱える問題を文献や実地調査で探り, その対応をどう行っているのかを「愛知県豊田市立東保見小学校」「岐阜県大垣市立西小学校」, 大垣市にある「ブラジル政府認定ブラジル人学校・HIRO学園」を例に論じる。その際, 各学校, 地域でどのように取り組みに差が出ているのかを調査・比較し, ブラジル人児童の教育について今後の課題と展望を導き出したいと考えている。また, このことを踏まえ, 公教育で国際理解教育に取り組む場合, どんな視点が必要になるのかも提起したい。なぜなら, ともすると「国際理解教育=小学校における英語教育」と誤解されているふしも見られるからである。今こそ「多文化共生」「多文化教育」の視点に立った国際理解教育が必要なのではないかと考えるし, ブラジル人の存在が逆に新しい視点を私たちに与えているように思われるからである。

序章, 第1-3章 (論文「上」を参照)

第4章 日系ブラジル人の子どもの教育

第1節 日系ブラジル人児童・生徒

1. 日系ブラジル人児童・生徒の現状

1-1 全国におけるブラジル人児童・生徒の実態

ここでは, 日系ブラジル人の子ども達の現在の状況を探る。そのため, 日本でのその増加の様子や, それへの対応を岐阜県を例に述べていく。また, ブラジルの教育や学校生活を明らかにすることで, 日本の学校で子ども達の抱える問題を明らかにしていく。

その教育制度や教育状況, 「学校」というものとのとらえ方の相違を探ると, 学校の中で子ども達に起こる, あらゆる衝突が見えてくる。その衝突を, 自分の調査や先行研究を基に深く見ていく。特に増加し続けている, 日本の小・中学校に在籍する日系ブラジル人の児童・生徒の実態を探っていく。1997年(平成9年)全国の小・中学校に通学する外国人児童・生徒のうち日本語教育が必要と学校が判断した人数は, 小学校・12302人, 中学校・4533人, 計16835人という調査結果が出されている。(資

料『文部省学校基本調査報告書』平成9年度版・平成11年度版) そのうち、実際に日本語指導を受けている児童・生徒数は、小学校・9908人(全体の約80.5%)、中学校3487人(約76.9%)である。1999年(平成11年)では、小学校・12383人、中学校・5250人、計17633人で、日本語指導を受けているのは、小学校・10320人(約83.3%)、中学校・4177人(約79.6%)である。

また、1997年3月に外国人の子ども達が在籍する全国の小・中学校を対象に、東京学芸大・海外子女教育センターが行った調査結果によると、外国人の子ども日本語能力について「すべての教科の学習についていける」と学校側が判断している子どもは、3割にとどまった。また、この調査によると、学校側の指導体制としては3割が「何ら特別な配慮をしていない」と回答しており、日本語指導で学習段階別のカリキュラムを作成している学校も13%に過ぎなかった。

そして日本語教育が必要とされている外国人児童・生徒の母国語別内訳では、1997年(平成9年)・1999年(平成11年)とも、ポルトガル語が最も多く、1999年でいうと小学校5512人、中学校2071人、合計7592人となり、全体の約43%を占めている。(文部省『学校基本調査報告書』平成9年度版・平成11年度版)

母国語別に見た、全国の日本語指導が必要な外国人児童・生徒数

ポルトガル語	中国語	スペイン語	フィリピン語	韓国・朝鮮語	ベトナム語	英語	その他	計
7,592	5,333	1,749	618	482	475	443	734	17,296

子どもたちの国籍・出身地別の調査は行われていないが、ポルトガル語を母国語とする子どもたちの多くは、1990年を境に目まぐるしく増加した日系ブラジル人労働者の子ども達であると思われる。先に資料「ブラジル人入国者の年齢推移」で見えてきたように、1991年～1992年より15歳～20歳未満の就労可能な若年青年層と、20歳代の青年層の特に顕著な増加が見られる。つまり、こうした青年層の増加とともに、子どもであろう年齢層(日本の義務教育期間までの学齢期の子どもをふくむ)の増加が目立っていた。これは家族の呼び寄せや当初からの家族ぐるみの来日が多くなったことを示すものであると考えられる。こういった子ども達は、外国で仕事をする親に伴って「一時的」「強制的」に異なる社会に向き合うこととなる。

1-2 大垣市における日系ブラジル人児童・生徒

大垣市には大垣国際交流協会『フレンドリー』N0.47 (July2000) によれば、2000年現在166人の外国人児童・生徒が在住している。また、その国籍別人数は、資料「大垣市外国籍児童生徒学校別在籍人数」(平成13年5月1日)、に示すとおりである。

* 大垣市の保育園・小学校・中学校の子ども数()内はブラジル人

	平成3年12月1日	平成12年5月1日
保育園	21(20)	59(41)
小学校	14(9)	122(95)
中学校	4(1)	48(30)
計	39(30)	229(166)

さらに平成13年度の、各学校が日本語の指導が必要と判断した子どもの数は、公立小学校で36人(10校に在籍)、公立中学校で10人(5校に在籍)である。(大垣市教育委員会資料より)

大垣市の外国人児童生徒在籍数の推移(各年5月1日現在) 大垣市立西小学校提供

年 度	全児童生徒数	外国人児童生徒数	外国人児童生徒の割合
1999年	14036	170	1.21%
2000年	13795	170	1.23%
2001年	13550	176	1.30%

大垣市のブラジル住民の人の多さ(「大垣市の外国人登録者数推移(国籍別表)」)を考えれば当然のことであるが、やはり多い。後に紹介する資料「都道府県別日本語指導が必要な外国人児童・生徒数(1999年度)」を見てみると、岐阜県で日本語指導が必要な外国人児童・生徒は小・中学校生で408人。大垣市ではその内の約11%を占める46人が生活していることになる。

ただしここに示している外国人児童数は、公立の小・中学校に在籍している子どもの数なので、HIRO学園やボルト・セグロなどのブラジル人学校に通う子ども達の数に含まれていない。よって、ブラジル人学校に在籍している日本語の指導が必要な子どもの数も含めて考えると、岐阜県において日本語の指導が必要な外国人児童の11%以上を大垣市が占めていることになる。

2. ブラジルと日本の教育の違い

2-1 ブラジルの教育

次に、ブラジルと日本の教育のあり方の相違について考えていきたい。これを明らかにすることで、日本の学校においてブラジル人の子ども達の抱える問題意識をよりはつきりと認識できると思うからである。ここではOVTA(財団法人海外職業訓練教会)のホームページ(<http://www>)とエレナ・コバヤシ(1995)を参考にしていきたい。

ブラジルでは教育は過去に於いては上流階級の、特に男子のためのものであったが、1946年になってようやく近代教育の制度が導入された。1961年に教育基本法が制定、さらに1971年法律5692号によって現行制度が確立され、この時点から中学課程が追加されて義務教育年限が8年となり現在に至っている。

ブラジルの経済、社会の近代化の中でも、教育分野は伝統的に立ち後れていたことが指摘されている。ブラジル経済の工業化が着実に進展し始めてから今日までわずかに40~50年にすぎないが、1960年代の初めにおいても、教育費に対するブラジルの経費は少なかった。つまり1964年にブラジルで教育にふりあてられた経費は、政府、民間および外国からの資金も含めてGNPの2.2%にすぎなかった。この結果、ブラジルの教育の特徴として、初等・中等教育適齢人口の就学率が低いことが挙げられる。1991年で7歳から14歳の子ども達の86%が在学しているが、50年代では38%だったことを考えると大きな前進であるといえる。¹

2-2 ブラジルの教育状況

子どもの学年は、日本では原則としてその子の年齢によって決まることになっているが、ブラジルでは子どもの年齢とは関係ない。ただし、入学する年齢は7歳と決まっている。幼稚園の期間の場合によって異なり、通常は5~6歳までで義務教育には含まれていない。義務教育制の初等科教育(PrimerGrau)が7歳から15歳までの8年間、義務教育制でない中等教育(SegundoGrau)が15歳から18歳までの3年、ないし4年間。その後大学の学部によって異なるが、18歳から21歳ないし24歳までの3年ないし6年間の大学教育(Superior)となっている。さらにその後2年間以上の修士課程(Mestrado)および博士課程(Doutrado)がある。

*幼稚園：義務教育には含まれない（5～6歳まで）

*初等教育(PrimeroGrau)：8年間(日本の小・中学校に当たる。通常は7～14歳まで)

*中等教育(SegundoGrau)：3年間(日本の高校に当たる。通常は15～17歳まで)

*高等教育(Superior)・・・大学の学部によって期間が異なる。例えば文型4年，工学系5年，医学系6年など)

ブラジルの教育特徴として、就学生の内途中で脱落する子どもがきわめて多いことも挙げられる。ブラジルの学校では子どもの能力で学年が決まり、試験に合格できない子どもは落第し、学業成績が優秀な場合は飛び級も出来る。したがって、1学年の子ども達の年齢は必ずしも同一ではなく、むしろ違った年齢の子ども達からなるケースのほうが多い [2]。1989年時点では義務教育人口3.117万人中、約88%の2.740万人が就学しており、約370万人が何らかの理由で通学していない。

先にも述べたように、ブラジルでは子どもの学力次第で学年が決まっている。よって入学後も成績不良や出席率等で落第・退学する者が多く、平均的に学期初めの生徒数を100とすると学期終わりまでに10%が退学する。残りの25%が落第し、進学できるのは約65%となっている。次に1981年に入学した1年生の卒業までの人数の推移を表す。

ブラジルの初等教育における1年生の卒業までの同級生の推移(単位:1000人)

年度	学年	学年全体人数	初年度比(%)	全生徒数	退学数
1981	1	6,830	100	22,414	2,430
1982	2	3,861	56	23,564	2,609
1983	3	3,174	46	24,556	3,793
1984	4	2,650	39	24,825	3,798
1985	5	2,746	40	24,769	3,093
1986	6	?	?	25,608	4,092
1987	7	1,633	24	25,936	3,436
1988	8	1,595	23	26,821	

AnuarioEstalisticodoBrasil1983～1990より

1991年の統計では、小・中学校の児童生徒の50%以上が落第している。そして、わずか39.2%の子ども達が小中学校を終えるが、平均して4回落第しているという。同じく1991年の統計では、小学1年生を途中で退学するのは25.4%，2年生13%3年生10.3%，4年生7.9%，5年生17.7%，6年生10.4%，7年生7.5%，8年生4.8%となっている。(この数字は落第した数も含まれているので正確な数字とは多少誤差がある。)

中途退学者がかなり多いが、その原因として次の3つが挙げられている。(エレナ・コバヤシ, 1995)退学者の多くは、主として低所得階級の子ども達である。つまり退学の主な原因として、家庭の経済的な問題があり、子どもが働かないと食べていけないという現状がある。落第した後学校を止める生徒もかなりの数になる。

2つ目の原因としては、学校側の問題もあるという。すなわち、教員の給料が非常に低いことである。所得が低いために教員を志望する人の数が年々少なくなり、その結果、雇用する学校側としては必ずしも高いレベルの先生を、相応の給料で雇用出来なくなるという悪循環を生んでいる。結局ブラジルでは、初等教育および中等教育に関して、公立校よりも教育能力の高い先生を雇用できる、有料の私立校に通える階級の子ども達が、より完全な教育を受けることが出来るということになる。

3つ目の原因は、ブラジルの教育内容が挙げられる。基本的な指導要領は国によって規定されている

ものの、実質的には全国的に必ずしも統一されていない。日本のように検定の教科書が採用されていないので、各校の教師は普通に販売されている本(ただし、各州の教育基準を満たしているもの)を選び、授業を行う。以上3つの問題が、ブラジル初等教育の中途退学者が多い原因とされている。

日本との違いとして、義務教育の年齢範囲の設定もそうである。義務教育を受ける権利を持っているのは通常7歳から14歳の子どもである。公立校(国立・公立・市立)の学費は無料である。たいていの場合、初等教育の前半の4年間、つまり小学校1年生から4年生までは、1人の先生がクラスすべての子どもの面倒を見、全教科を教える。初等科5年生からは科目ごとに異なる先生が教えるようになる。初等教育から中等教育にいたるまで、学校は半日制である。子ども達は半日を学校で暮らし、半日を家で過ごす生活に慣れている。日系人の親達は子どもに「習い事」(バレエ、英語、日本語、テニス、柔道、ピアノ、空手、ボーイスカウト、水泳)をさせることが多い。高等教育、すなわち大学の場合、2部生(昼間、夜間)の大学と、全日制の大学がある。大学に進学する人たちの多くは、働きながら夜間部に通う。

初等・中等教育では、レベルの高い教育は私立で行われると言われるが、高等教育に関しては授業料が免除される公立への受験競争が一番激しく、就職活動の際、企業から私立大よりも高く評価される。

従来ブラジル社会では日系人は教育熱心であると言われてきた。実際、ブラジルの日系人口は全人口の1%にも満たないが、ブラジルの狭き門といわれているサンパウロ大学の学生の20%以上は日系人で占められている。ここで私の中にひとつの疑問が持ち上がった。では、なぜ日本に來日した日系ブラジル人児童・生徒の高校・大学進学率は極めて低いのだろうか？

2-3 「学校」というものとの見え方の相違(集団重視と個性重視)

ブラジルでは学校は勉強をし、授業を受けるだけの場であるという考え方が主流であり、日本のように学校側の子どもの教育に対する家族の積極的な参加を期待するものとは大きく異なる。半強制的なクラブ活動や掃除当番などはなく、授業が終わればすぐ帰宅出来る。土曜日は授業が無い。

日本の学校というシステムは、クラス(チーム)の調和、つまり集団活動重視が基本となるもので、一つの枠組みの中で統一行動をとることが主体となっている教育なのである。加えて、日本社会では子どもの親として、「うち」と「学校」とを統合させようとする考えが発達している。そしてそれを行うのは主に子どもの「母親」である。しかしブラジル人女性は「うち」や「子どもの親」というよりも「臨時的労働市場」に組み込まれており、子どもの教育や学校の要求に応えるための時間はほとんどない。

ホワイトの研究(1988)によると、教育プロセスにおいて集団行動を重視する学校は、「全生徒が等しい能力を持ち、同じ能力を持った者同士のグループ学習でこそ、学習はよい成果をあげる」という考えがあり、また教師には競争によるプレッシャーから集団倫理を守る」役割があるとする考えに基づいているという。こうした考えは職場でも反映して見ることができる。つまり、職場では同じグループの労働者同士の協力が企業中でのグループ間の競争、協力につながるとされているのである。

ブラジル人の以前の生活は極めて「個人主義的なもの」である。日本の「集団活動重視」の教育的意味は、理解するのに苦労するようである。だが、彼らがこうした考えを受け入れる際、自分子どもからの影響に助けられるといったケースが多い。しかし、何も「集団活動重視」のみにとどまらず、日本の生活の慣習や文化についても子どもから教えられ、助けられる、多くのケースが文献や各国際交流団体などの資料で報告されている。特にブラジル人集住地などでの「共生」に当たり、大人同士の溝を子どもが埋めるケースは珍しくなく、同時にひどく望ましいことである。

子どもは学校での世界と、家庭での全く違った世界のなかでギャップを感じながら、学校での行動様式や地域の様子をいち早く覚えていく。その順応性は驚くべきものである。言葉、つまり日本語を

覚えるのが早い、ということが一番大きな原因である。朝から夜まで工場などで仕事をしている大人たちは、日本語と接する機会が少ない。それ以上に日本語を学ぼうとしても、それが出来る時間も場所も無い。

またブラジル人の多い集住地で暮らしている場合には、日本語を覚える必要性を感じないブラジル人も多いため、ますます日本語を話そうとしなくなる。子ども達は、場合によって周りとは違う自分の親のことを恥ずかしく感じるようになることもある。だが、このことは子どもたちが学校文化へ強く統合されていることを意味するものでもある。

子どもたちが抱える問題は、その教科内容だけに関わらず、コミュニケーション不足や学習内容・教育方法・教育的意味の置き方の相違とも関わっている。両親は日本語で書かれたものを読むことが出来ないために、内容や基本教育において用いられている教育方法やその教育精神を理解することが出来ない。よって日本の教育がブラジルの教育と違う面ばかりが親達によって認識されている形となる。

このようなことから、長期滞在を予定していないブラジル人の親の中には、自分たちの子どもを日本の学校へ行かせる必要性を感じない者が顕著に見られるようになってきた。各地に出来始めているブラジル人学校(高い費用を要するにもかかわらず)がそれを表している。

また同時にブラジル人学校の費用が高いため、学校自体にも行かせない親も多い。彼らの場合、最初から学校に行かないというよりも、次に述べるような学校内での「衝突」を経験し学校から「逃げる」というかたちを取らざるを得なくなった、と言うべきである。

3. 学校の中で起こる衝突

3-1 掃除当番、給食とお菓子、規則の考え方

先にも述べたように日本の教育は集団性を強調するものである。教育・学習の方法には、室内の子どもによる発表、グループ作業、学校での責任感の大切さを教えるもの(つまり係の仕事やそうじ当番、給食当番など)、様々な文化イベントや文化・体育大会の組織等の課外授業におけるグループづくりなども含まれている。

ここでは規範、日本社会の責任感や組織、計画性や相互協力を評価する考え方に重点をおいており、ブラジル人がそれと接触する上では、彼らの年齢が高ければ高いほどそれらの習得に際して衝突が見られる。

次に、日本の学校で起こる学校生活の中での文化的な衝突を、実際にいくつかの小学校を見学して気がついたものを中心に次の3つに収縮する。それぞれどのような選択を子どもがしているのか、現場の先生方に聞いたものを参考に付け加えたい。さらに、それらの衝突の中で子ども達にもたらされる問題と、子ども達が今どんなトラブルを抱えているのか、またそれに対する子ども達の意識を、浜松市立瑞穂小学校・国際理解指導推進部の「外国人児童・生徒(日系ブラジル人)」対象のアンケート調査(1991)、井桁碧の調査(1993,1994)、そして1991年12月17日の毎日新聞の記事を参考に明らかにしていきたい。

1) 掃除当番

日本の学校では、自分たちの汚した教室や廊下を自分達で掃除をすることに教育的効果を考えるが、ブラジル社会では「掃除はレベルの低い仕事」と考えられている。

ブラジルでは、子ども達の授業の後、掃除をする専門の業者が学校に入り教室や廊下などを掃除する。「自分達の教室(学校)だから、自分で掃除するのは当たり前」という日本では当然とされる考え方はブラジルでは一般的ではない。

見学した学校の中には、さわいで遊ぶ子どもが多いためブラジル人児童だけでひとつの場所を掃除するケースもあった。しかし特別な技能も必要なく、語学力も必要としないこうした作業には子ども

達も適応しやすいようである。掃除の時間はブラジル人の子が日本人のこと溶け込み、友達を作ったりする機会のひとつだといえる。

2) ブラジルの「おやつ」と日本の給食

半日制のブラジルの学校では、20分程度の「おやつ」を食べたりする時間がある。昼食は家で食べる。20分のこの時間はいわゆる「自由時間」で、それぞれが外や教室内で遊ぶ時間である。この時間には、それぞれが好きな物を持ってきて、それぞれ好きな場所で、好きな友達と好きなように食べる。ブラジル料理の味付けはどちらかというと塩辛いが、お菓子類は日本のそれよりもずっと甘い。日本独特の醤油と砂糖を使った甘辛い味に相当するブラジル料理はなく、甘いものと塩辛いものがはっきりしている食べ物を中心である。

ブラジル人学校では、ブラジル料理を給食として出しているところもある。日本におけるブラジル人労働者の家庭では、食材も容易に手に入ることからブラジル料理を食べる傾向が強く見られる。よって、日本滞在の期間が長い子どもたちでも、多くは日本の食事(学校給食)に馴染めないことが多い。給食を食べなければならない子ども達にとって、日本食の味に慣れるまで、それが苦痛としかならないのではないかと懸念される。

3) 時間などの「規則」

学校において最も深刻な文化的衝突といえば、やはり「規則」や「習慣」をめぐるものである。時間を守ることに関しては、日本では小さな頃からしつけられている。だが、ブラジルでは大人もあまり時間を守らないし、先生が授業に遅れてくることもある。日本のように何時何分の単位まで細かく決められていることは、「窮屈」と感じる子どもが多いようだ。

制服に関しては、ブラジルの私立学校でも制服を義務づけているので特に抵抗は無いと言える。ただ冬の寒いときに、制服の半ズボンをはいて行かなくてはいけない事などには疑問の声が上がっている。ブラジルでは雪が降らず、日本よりも暖かな国であるからであろう。

その他、女の子のおしゃれに関して触れなければならない。ブラジルでは女の子がピアスをしたり指輪や口紅、マニキュアをすることは、個人に任されている。日本の学校では、「他の子がしないのだから、例外は認められない。あなただけ良いと言うわけにはいかない。」という考え方をする。これに対し、納得して女の子達はおしゃれを控えるかということではなく、「やきもちを焼く子がいる」とか「先輩に何を言われるのか分からないから…」というところから控える様である。

3-2 子ども達を取り巻く問題

以上見てきたように、子ども達は自分の文化的背景とは違う、容易に理解できない文化的な背景があることを分かっている、どのように状況を乗り越えていけるのかが分からず戸惑っていることが多い。

あらゆることで子ども達に「集団的活動」を強要し、時には干渉する、こうした日本の学校での教育は、子ども達だけでなく、子どもたちの親からも「過度」なものと感じられている。それを説明しお互いに理解をはかろうにも、両者間で言葉が通じないという問題のため、歩み寄りが困難なこととなっているのである。言葉の壁は、大きなストレスとなって子ども達やその両親におそいかかる。

実際にいくつかの学校を回る中で感じたことであるが、幾分落ち着きが足りなかったり、ちょっとした事ですぐに暴力的になってしまう子どもが、ブラジル人の子ども達に多かった。言葉が分からない事からくるイライラ感、さまざまな相違の中で生まれるストレス、自分のことを話せる人間のいない寂しさなどが、暴力という形で現れる。

また、外国人児童・生徒に対する厳しい態度(干渉)が登校を妨げているということも指摘されている。日本人の子ども達にとってはこうした圧力がモラル形成の為に必要と感じるとしても、ブラジル人の子ども達にとっては一種の「暴力」と感じるようだ。この「厳しさ」は、当然小学校よりも中学

校のほうが多く感じられる。ある調査によると、学校に対して否定的な意見を持っているのは、小学生よりも中学生のほうが多かった。否定的な意見の中心は「厳しいから」というものが多かったという。

先に述べたような様々な理由からきちんと学校生活を送ることができないために疎外されたり、規則づくめにされたと感じることがあれば、彼らは学校から「逃げる」ことを考える。日本にいる14歳以下のブラジル人23000人が学校に行っていないという、文部省のデータがメディアを通して明らかになった。(リリ川村,2000)

彼らの多くは労働もしていない。親が工場で仕事をしている間、子ども達は家にいるのである。テレビを見たり、ゲームに興じたり、公園をぶらついてやがて同じような子ども達と“つるむ”ようになる。暴力行為や犯罪を起こすケースもある。

これらの子ども達を取り巻く問題を改めて認識するために、自分なりに次の4つにまとめた。また、それに対する子ども達の思いなどを、訪問した小学校で聞いた事実と、浜松市立瑞穂小学校・国際理解指導推進部の「外国人児童・生徒(日系ブラジル人)」対象のアンケート調査(1991)、そして、井桁碧の調査(1993,1994)を参考にまとめる。

浜松市立瑞穂小学校・国際理解指導推進部の「外国人児童・生徒(日系ブラジル人)」対象のアンケート調査(1991)は、浜松市内の小・中学校に在籍する男子24人・女子29人が対象となっている [5]。井桁碧の調査(1993,1994)では、「子供から見た日本の学校～言葉の壁と子どもたちの抱える問題」より、対象となった子どもの年齢割合は次の通りである。

調査対象の子どもの年齢, N=25

7歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳
5人	2人	3人	3人	4人	2人	3人	2人	1人

1) 言葉の問題

親のデカセギに伴い、半ば“強制的”に日本にやってくるブラジル人の子ども達は、ほとんど日本語が出来ない状態でやってくる。(家庭ではポルトガル語を話すのが一般的のようである。)前章で、地域での「共生」の問題を考察したが、その時も大きな課題として、この「言葉」があった。子どもについても、それは同じである。

日本語が出来るか出来ないかは、学校での生活や授業などに密接に結びついているようである。当然のことではあるが日本語が出来ればコミュニケーションがとれ、相手の意思が分かると同時に、自分の意思も伝えることが出来る。だが、分からなければ自分を表現できず、学校生活も難しいものとなり、時には「苦痛」となってしまう。

それをよく表しているのが、浜松市立瑞穂小学校・国際理解指導推進部の「外国人児童・生徒(日系ブラジル人)」対象のアンケート調査(1991)の「日本の学校で困ったこと」という項目に対する子どもたちの答えである。

「日本の学校で困ったこと」という質問に最も多かったのが「言葉が分からない」の20人(38%)で、次いで「学習が分からない」の16人(30%)、旧本式のトイレ」と答えた子が8人(15%)であった。約4割の子ども達が、日本での学校生活の一番の課題であると答えたことになる。

ある小学校で出会った子どもは、来たばかりで日本語が全く分からなかったのだが、ひどく暴力的でよく暴れた。その様子は見ていてとても痛ましく、何がなんだか訳が分からないと叫んでいるように見えた。実際にこのような子ども達に対する相談員が存在するのだが、その相談員の数はまだ十分ではないという印象を受けた。(この相談員については、大垣市の例を挙げて、後に詳しく触れることにする。)

また、外国人児童に多く見られる「教科の遅れ」も、言葉が分からないことがその原因であることは、容易に想像がつく。同じく、浜松市立瑞穂小学校・国際理解指導推進部の「外国人児童・生徒(日系ブラジル人)」対象のアンケート調査(1991)によると、子ども達の嫌いな教科は日本語の能力に関係する教科であることが分かった。

具体的には、子ども達が「嫌い・苦手」とした教科は「社会」と「国語」である。日系ブラジル人の子どもたちに、「教科の中で、分かる教科に◎、大体分かる教科に○、少し分かる教科に△、全く分からない教科に×を付けなさい」としたところ、「社会」では×が12人、△が19人だった。「国語」では、×が6人、△が14人だった。

一方「体育」「図工」などは子ども達が「好き・得意」とした教科であった。これらはブラジルの学校のカリキュラムには無いのだが、言葉の壁が薄いからか、抵抗感や違和感を抱くことは無いようだ。「体育」で◎が24人、○が18人で、「図工」は◎が22人、○が15人だった。次いで「算数」の◎17人、○18人、「音楽」の◎14人、○18人であった。これらもまた同じ理由であろう。

これは、私が実際に小学校やブラジル人学校・HIRO学園を回った時にも、そのような印象が強かった。特に音楽では、生き生きとした表情で歌う姿が目立ったし、逆に国語などでは「しぶしぶ」教科書を取り出す、といった子どももいた。

この様に「言葉」はブラジル人の子ども達やその両親にとって、日本の地域で生きていく事から、学校の勉強、しいては学校生活の快適さに大きくかかわっている事がいえる。ひどく重要なポイントであると同時に、子ども達が問題・課題として意識しているのも、またこの「言葉」である。

だが、この「言葉」つまり「日本語」を習得する事と同時に、「ポルトガル語」の習得についても考えなければならない。子どもが学校生活にいち早く溶け込むのは「日本語の上達」と密接に関係しており、学校生活を行いながら日本滞在を続けていけば旧日本語」の能力は向上していくだろう。

けれど、家族の中でのコミュニケーションに必要な「ポルトガル語」の能力は年月と共に低下する。また、その子どもの将来ブラジルへ帰ることになったら、どうなるのか。ポルトガル語の習得・喪失は、「親子関係」とその子の「将来」にとってどのような意味を持つかも、重要なポイントであることを付け足しておく。

2) 文化の違いからくるもの(学校のあり方)

さらに、先ほど述べた文化の違いからくる衝突の3つについても、子ども達の抱える問題と共通している。「掃除(給食)当番」、「給食」、「規則」である。ここでは、あまりサンプル数が多いとはいえないのだが、井桁碧の調査(1993,1994)「子供から見た日本の学校～言葉の壁と子どもたちの抱える問題」にそって見ていきたい [7]。

掃除などの「当番」のシステムについては、「嫌い」「あまり好きではない」という子は多くは無い(8人中3人)。だが、実際のところ日本の子どもでも、あまり好きではないと答えるだろう。今回のこの調査の中で答えた子どもの中には「掃除当番はいやなので、言い訳を作ってわざと遅れていく。」という子もいる。「給食当番はいい。掃除はアレルギーがあるから、それが一番いや」と答えた子もいた。

しかし、「給食当番や掃除当番も気に入っている。」あるいは学校で好きな時間として、算数や国語のほかに、掃除当番をあげた子もいた。訪問した学校ではグループで行うこれらの活動をきっかけに、友達と話し仲がよくなるという効果が見られた。最初はブラジルにはない活動システムに戸惑うかもしれないが、やがては抵抗無く受け入れていくようである。

「給食」については、この調査の中で井桁碧は「当初は戸惑ったにせよ、大人に比べれば、ほとんどの子ども達が給食の味を受け入れているように感じた。」と述べている。実際にこの調査結果で得られた子ども達の声の代表は、「梅ぼしが嫌い。後は大丈夫。納豆は好き、妹も納豆は好き。カレーが好き」や、「入学直後はきらい(特に日本食が嫌い)だったが、今は好き」というものである。

だが訪問した中では、給食の味に馴染めず、ほとんどを残すブラジル人の子どもが目立った。ほとんどではないにしても、給食を楽しみに食べている子どもには出会わなかった。たくさん残す子どもは、日本に来て1年前後の子ども達にやはり多かった。学校によっては、最初はお弁当を持ってきてもいいというところもあるようだが、ほとんどは「特別扱いはよくない」「他の子がうらやましがる」というような配慮から給食を食べるよう指導している。

ブラジル人学校HIRO学園では、給食はすべてブラジル料理であった。(ブラジルには給食のシステムは無いが、日本では共働きの親がほとんどなので学園では給食を出している。) 学園に通う子どもで、前は公立の学校に行っていたという子どもに学園はどうか、と質問したところ、「ブラジル人の友達がいるうれしい」という答えの次に、「ブラジル料理が食べられてうれしい」と答えた。

最後に制服などの規則であるが、「日本は制服だし、学校では上履きをはかなくてはならない。」などという意見もあるが、全体として制服についての違和感はあまりないようである。つぎにアクセサリなど、いわゆる「おしゃれ」については、ブラジルでピアスやマニキュア、口紅を小学校でする習慣がある。向こうでそのような生活をしてきた子ども達にとっては、なぜそのような個人的なことまで学校が干渉をするのか、違和感を持っているようだ。

学校ではピアスに関しては「禁止」はしていないようである。訪問させて頂いた学校でも、そうだった。だが、学校では、子ども達の全体としての統制が失われることを恐れている。給食の時間のお弁当に関してもそうである。「特別扱い」は、やはり好ましくないのである。だが服装や髪型、ピアスなどの規則は、学校以外の生活の場で楽しむことが出来ているので、子ども達の不満はあまり集積しないで済んでいると考えられている。

3) 家庭の問題

家庭の問題では、今までのようなアンケート調査の結果は無い。その内容はひどくプライベートで、デリケートなことであるので、アンケート調査項目には無いのであると考える。だが、これは日本人の子どもにも同様にいえることであるが、「家庭の問題」を抱えている子どもは学校生活においても何かしらの問題を抱える。

ブラジル人児童・生徒対象の「日本語学級」がある学校には、必ず一人はポルトガル語が話せる相談員(もしくはポルトガル語が話せなくとも、ブラジル人児童・生徒体操の相談員)が在籍している。市で雇われたり、県の教員が相談員になったりしているが、彼らは児童・生徒の抱える問題を聞いている。

子ども達の抱える「家族の問題」は多様である。多様すぎてここでは統計化することは到底出来ない。また、その問題の内容は当然プライバシーにかかわるため、詳細に教えては頂けない。だが、その中でも「両親が離婚するかもしれない」「父親が失業した」という問題は多いようだ。

第2章でも見てきたように日本経済の不況期によってますます失業者が増え、中でも外国人労働者から解雇されている状況である。この先、ますますその傾向は強まり、子ども達の家庭を巡る状況も変化することが予想される。(余談ではあるが、あまりに不況が深刻で失業者も多くなるにつれて、ブラジル人向け新聞などに様々な宗教団体の広告が増えたという。)

ブラジル人労働者がいかに不安定で一時的な労働の状態であるかを第2章で見てきたわけだが、それを反映し、子どもの教育や将来の見通しが立てにくい状況にある事が明らかになっている。子どもの教育の重点をどちらの国に置くかは、親の将来像に大きく関わっている。帰国の可能性が大きければ、おそらくはブラジルでの教育に重点をおくであろうし、帰国の可能性が見えてこない場合は日本での教育に重点をおくことが考えられる。

しかしながら、このような将来像が立てられない場合には必然的に子ども自身も落ち着いた状況下で生活することが出来なくなる。下手をすればどちらにも重点をおくことが考えられないまま、ただ時を過ごしていくだけの場合もある。一方、見通しを立てることが出来た場合にも、その見通しがい

つ何時崩れるかもしれない。そういった危うく不安定な状況に、日系ブラジル人労働者の家族が居るのである。

相談員はこのような相談の際、問題が問題なだけに特別な処置が出来るわけではないのだが、やはり話を聞いてあげることで子ども達の悩みを和らげることが出来ているようである。子どもは家に帰っても、夜遅くまで両親が働いていたり夜勤の関係で寝ていたりするため多くが孤独を感じている。学校でも言葉が問題でなかなか自分の話を聞いてくれる人がいないため、そのような相談員の存在はひどく子ども達を支えていると感じた。

また、相談員は子ども達だけではなく、両親の相談も受けることが多いという。保護者との連携・コミュニケーションの疎通は、子どもの教育についてもひどく重要なことであるため、おおきな効果であるといえる。

4) 「いじめ」と「差別感」

ここで、ひとつの新聞記事を見てみる。(資料「泣いている日系人子女」毎日新聞,1991年12月17日)これは1991年に愛知県豊橋市教育委員会が調査した、市内の日系南米人児童56人と生徒20人を対象に行ったものの記事である。

この結果、「いじめ」に遭った経験の多さと高校進学の高難しさが浮き彫りになった。高校進学の問題については、日系ブラジル人児童・生徒の学力の低さのみではなく、経済的な問題も含まれる。ここでは主に「いじめ」についてとり上げていきたい [8]。

小学校の半数以上はいじめに遭った経験を持っている。「日本の学校は楽しいか」と言う問いに対して、小学生は87.5%が「とても楽しい」と答えているが、中学生になると35%に激減。45%が「嫌なことが多い」と答えている。驚くべきことに、小学生では52%、中学生で42%がいじめられた経験があると述べている。

「言葉が違う事」や「体つき」などで日系人をいじめやからかいの対象にするケースがあるようだ。「体つき」というのは主に女の子についてで、日本児童・生徒よりも幾分早く体が成長するため、それについてからかわれるようだ。こういったものの延長上に、第2章で触れた「ガイジン排除」があると思われる。相手をよく理解出来ない(しない)ことから、「排除」する方向へと走ってしまうわけである。

1997年10月に愛知県小牧市で起こった「少年リンチ殺人事件・エラクレノくん事件」は、まだ記憶に新しい。西野瑠美子『エラクレノはなぜ殺されたのか～日系ブラジル人少年・集団リンチ殺人事件』(1999,明石書店)にその詳細が書かれているが、この事件はブラジル人の少年達が、日本人の少年達20数名から集団リンチを受け、その中で当時14歳だったエラクレノくんが殺された事件である。

事件はある「不良ガイジングループ」と、日本人少年とのこぜり合いが発端で起こった。ガイジングループに、ゴルフクラブで車を叩かれ傷つけられた事に対し、日本人の少年たちは「ブラジル人」に仕返しをした、と述べている。エラクレノくと、その時彼と一緒にいたブラジル人のグループは、「不良ガイジングループ」とは何の関係も無かった。が、エラクレノ君たちが同じ「ブラジル人」というだけで、襲撃の対象となったのである。そして死にまで、至らしめたのである。

T.ラズロ『ブラジル人というだけで』(1998,一緒企画)によると、この事件に対する報道の多くは、毎日新聞(1997年11月25日)やTBSニュース23(1998年5月24日放送)のように、「日本の中学校に通うとしないブラジル人少年」や「ブラジル人によるトラブル」を描くものが目立ったという。ここに、大人の世界の中での「外国人排除」の動きが見え隠れしている。おとなや社会がこの状態では、少年達にある「外国人排除」の意識を拭うことはひどく難しい。

ところが、子どもは「外国人排除」の意識を間違ったものとして、純粋にとらえることが出来るようだ。浜松市立瑞穂小学校・国際理解指導推進部の「外国人児童・生徒(日系ブラジル人)」対象のアンケート調査(1991)では、「担任への配慮もあると思うが、6割の子ども達は、ブラジルでの子ども達

の生活習慣や事情を子ども達なりに理解して、自分達と同じように出来なくても好意的に受け止めている」としている。

この分析結果は、「ブラジルの子は、宿題をやってこなかったり、給食を残したりすることがありますが、どう思いますか」という質問に関しての答えから出されている。答えは選択性になっており、「『不公平』『ひいき』と感じる。」が全体で7%強。続いて「『何とも思わない』『分からない』」が24%強で、「仕方が無いと思う」と答えた子どもは60%を占めていた。

だが、実際に訪問した中でブラジル人学校に移ってきた子ども達は、その転校の理由として、「学校でいじめられたから」としていた子どもが多かった。事実として、「からかい」や「差別感」は学校に存在している。ところが、同時に先の調査結果では「ブラジル人児童がその子の学級に在籍しているか、していないか」で日本人の子どもたちの、ブラジル人の子どもへの態度や理解に差が見られた。

具体的には「ブラジル人の子どもと話したことがあるか」、「ブラジルの子は自分達と違うと思いましたが」、そして先ほどの「ブラジルの子は、宿題をやってこなかったり、給食を残したりすることがありますが、どう思いますか」という質問の答えに違いが見られたのである。

「ブラジル人の子どもと話したことがあるか」に対しては、在籍学級ではほぼ半数の子どもがブラジル人の子どもと話していることが分かっている。その反対にブラジル人の子がいない学級の半数は「全然話したことが無い」と答えている。

「ブラジルの子は自分達と違うと思いましたが」では、「在籍学級・無在籍学級ともに、自分達と違うと思う子は想像より少なかった」が、「大体同じと答えた児童が在籍学級に多いのは、いろいろ接して感じた率直な意見である一方、無在籍学級においては接する時がないせいか、『あの子はブラジル人だ』という先入観を持ってみる傾向もあり、あまり変わらないという人数に差が出たようだ」としていた。

やはりこの「差別感」「いじめ」という部分で重要となってくるのは、日本の子ども達がじかにブラジル人の子ども達と接し、ブラジル人の子ども達についての理解をいかに深めるかという点である。そのための学校・教師の指導が、ひどく重要な意味を持つ。また、「多文化教育」の必要もここにある。

第5章 教育現場での取り組み

1. 岐阜県大垣市立西小学校

1-1 大垣市立西小学校の紹介（平成13年10月19日現在）

住所：岐阜県大垣市久瀬川町6の110，交通：近鉄西大垣駅より徒歩10分 教職員数：32人，在籍児童数：612人 20学級 在籍外国人児童数（ブラジル人児童数）：9人（男5人・女4人）

前にも紹介した通り、岐阜県大垣市には多くのブラジル・ペルー人等の外国人が在住し、その数は全国7番目の多さである。平成13年では大垣市民のうち28人に1人が外国人で、外国人の中の68.6%を占めるのがブラジル人である。ブラジル人は家族を国から呼び寄せる傾向が強いため、当然その子ども達も多く大垣市に在住している。

資料（提供：大垣市立西小学校 山口モエ先生）によると、大垣市の外国人児童生徒在籍数は次のようになる。このうちブラジル出身者は、市内小中学校24校で約170名にもなる。これらの子ども達の学校別在籍人数の状態は、大垣市教育委員会・澤田文彦先生から頂いた資料「大垣市外国籍児童

生徒学校別在籍人数」(平成13年5月1日)に示すとおりである。

さらに平成13年度の、各学校が日本語の指導が必要と判断した子どもの数は、公立小学校で36人(10項に在籍)、公立中学校で10人(5校に在籍)である。(大垣市教育委員会資料より)

大垣市の外国人児童生徒在籍数の推移(各年5月1日現在)

年 度	全児童生徒数	外国人児童生徒数	外国人児童生徒の割合
平成11年度	14036	170	1.21%
平成12年度	13795	170	1.23%
平成13年度	13550	176	1.30%

大垣市立西小学校提供

大垣にあるブラジル政府認定のブラジル人学校「HIRO学園」へは、何回かお邪魔させていただいた。ブラジルの子ども達と、ブラジルの教育を日本で受けている彼らは日本の子ども達と変わらず生き生きと楽しそうだったが、そのなかで、日本の大垣の学校で学んでいるブラジルの子ども達は、どんな様子なのだろうと思った。それが今回の大垣市立西小学校「日本語学級」への訪問へとつながったのである。さらに、大垣市立西小学校「日本語学級」の真淵直子先生・高木恵理先生、巡回相談員の山口もえ先生(平成13年10月19日)、そして岐阜県大垣市教育委員会の澤田文彦先生(平成14年1月21日)にもお話を伺うことが出来た。

1-2 「日本語学級」

大垣市では平成4年度から、市内でも規模の大きい西小学校に「日本語学級」を設置し、県からの加配教員2名と市単独事業としてポルトガル語通訳者1名を配置し、大垣市全体の外国人児童生徒教育に努めてきた。教室はブラジル人・ペルー人児童が対象となっているが、設立当初からブラジル人児童が圧倒的に多数を占め、現在はブラジル人児童のみが在籍している。そして2000年(平成12年度)から2年間文部科学省より外国人子女教育受入推進地域の指定を受け、西小学校をセンター校として、従来の日本語学級と平行して新たに外国人児童生徒の在籍校への巡回相談を開始し、外国人児童生徒教育の一層の充実を図っている。

1) 日本語学級の教員

教室には大垣市の単独事業として1人のポルトガル語通訳の邑井先生、大垣市立西小学校教諭の馬淵先生、同じく高木先生の計3名の先生方がいらっしゃる。随時子どもたちのクラス担任と連絡を取り合い、子どもの日本語習得の状態や生活態度などの情報交換を行う。子どもが日本語学級に来る必要があるかないか、いつクラスに返すかどうかなども決定する。また後で詳しく述べるが、月に2回程度、市からの巡回相談員(加配教員1人・ポルトガル語通訳3人)が来校する。

2) 通級する子ども数

現在、日本語学級では、大垣市内の小中学校に在籍するブラジル人の児童生徒を対象に、適応指導・日本語指導・教科指導を行っている。火曜日から金曜日まで、子ども達は週に1回大垣市の公用車とタクシーによる送迎でこの学級に通う。このような公費での送迎は、全国では珍しい様である。学級を卒業すると所属学級の方へ完全に戻ることになっている。

見学させていただいたのは金曜日で、その日は3校より10人の子どもたちが来ていたが、曜日によって子どもの数は違う。やはりどこの学校でもいえることだが、親の仕事の関係などで転入出がひどく激しい。転校手続きもしないまま、他県へ移ってしまうケースも珍しくは無い。訪問した10月19日時点で通級する子どもの数は次のようになっている。

火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
中学生5人・小学生2人	中学生5人・小学生2人	小学生4人	小学生10人

数はこのようになっているが、各学校のクラス担任や学年の関係で、全く日本語が話せないような子どもでもクラスに在籍している場合がある。例えば1年生のあるクラスにはそのような子どもは3人いるが、クラス担任が日本語なども教えている。クラスの様子やクラス担任で、状況はそれぞれ違う。よって大垣市では日本語の指導が必要とされている外国籍児童は36人であるが、実際にこの「日本語教室」に通ってきている児童は、上の表で示したとおり、28人である。

大垣西小学校に在籍しているブラジル人の子ども9人のうち、この日本語学級に所属しているのは1年生の男子1人と6年生の男子2人だけである。後の子ども達（1年生：男子2人・女子2人，3年生：男子1人・女子1人，4年生：女子1人）は、各学級で学習を行っている。

3) 時間割り

日本語による朝の会から始まり、給食、帰りの会、掃除などをして下校する。

9:00 9:30 10:15 10:40 11:25 11:35 12:20 13:05 13:35 14:00

朝の会	授業1	休	授業2	休	授業3	給食	帰りの会	掃除
-----	-----	---	-----	---	-----	----	------	----

始業は一般学級よりも約1時間遅れて始まる。これは、西小学校以外の子ども達が、各自学校の学級で朝の会をしてから日本語学級にやってくるからである。それぞれの担任の先生と朝に顔を合わせ、それからタクシー・市の公用車で日本語学級へ向かう。同じく日本語学級が終わってからも、各自学校の学級へ一度は帰ることになっている。

日本語学級での朝の会では、日直が日本語で司会をする。「日直の話」なども日本語で話す。先生の話は日本語で話された後、通訳の先生がポルトガル語で訳す。

今回給食の時間では、子ども達の給食に対する抵抗はあまり感じられなかったが、日本食がなじみずにいる子ども達も少なくないという。(これはどこの小学校でもいえることである。) 家からお弁当を持ってきた子どもも以前はいたようだが、早く慣れるよう指導をしている。

時間の関係で今回は帰りの会・掃除を見学することが出来なかったが、掃除に関しても子ども達の抵抗が大きいようだ。ポルトガルでは掃除はレベルの低い仕事とみなされており、日本のように自分達で汚した場所を自分達が掃除する事に教育的な意味がない。

4) 指導内容

① 適応指導について

朝の会において時節や行事に合わせ、日本の文化や生活習慣・学校の決まりなどについて指導し、理解を得ることにしている。また、子ども達は文化や習慣の違いから生じる悩みを通訳の先生に訴えることも多い。それを十分に聞いて、どうしたらよいかをポルトガル語を介して指導し、心の安定をはかっている。

身の回りにポルトガル語を理解できる人がいないため、日本語学級に来てブラジルの友だちと話すことをとても楽しみにしている。在籍校を欠席しがちな子どもも、日本語学級の日には休まない。彼らにとって自分が受け止められているという、大切な場となっている。

② 日本語・教科指導について

日本語の能力によってグループ分けし、3人の教師がついてそれぞれ個人指導にあたっている。例えば見学に行った日では3つのグループ（入門2人・初級6人・中級2人）に机を分け、それぞれ一

人づつ教師が担当した。

入門ではひらがなを中心にプリントを使って学習していた。ここでは日本語がまだ分からない子どもが中心なので、ポルトガル語通訳の先生がポルトガル語で教える。

初級では形容詞の勉強やカタカナ、教科書を使った読みの練習、掛け算や割り算などを学習する。だいたい日本語を理解する子ども達なので、使われるのはほとんど日本語である。(資料「日本語学級の教材」)

中級では国語の教科書を中心にし、漢字ドリルや計算ドリルを使う。ここでは日本語のみしか話されない。日本語の能力はもちろんであるが、教科(算数)の学力も重視されている。

子どもの来日パターンや家庭の様子によって日本語の能力は多様であり、それに対応するために様々なテキスト、プリント類の教材が用意されている。例えば小さなころから日本にいる子どもは、日本語での会話はとても早くできるが書くことがひどく苦手であったり、ポルトガル語が不十分であったりする。それぞれに対応し、的確な個人指導を行うことが重要である。

また算数では「九九」を覚えることが困難なようだ。日本人の子ども達はリズムで九九を覚えてしまうが、ブラジルの子供達は口が上手く廻らない。そんな時は絵を書いたり、最初から数字を足しながら手を使いつつ答えを導き出している。日本人の子ども達と同じ教室に戻った時、このような所で差が開いてしまうのではないかと思った。算数に限らずブラジル児童の学力問題は深刻である。

1-3 巡回相談(大垣市教育委員会)

平成12年度より月に2度程度、大垣市教育委員会による巡回相談員が来校する。巡回相談では、加配教員1人と巡回相談員(ポルトガル語通訳)3人が交代で一般校(外国人児童生徒が在籍する学校)を訪問し、適応相談・日本語指導・教科指導を行っている。

ポルトガル語の通訳はイビデンの通訳を兼ねた方で、会社の好意により平日の休みを利用して学校を訪問している。3人で交代制にしており、基本的に加配教員の山口先生と通訳の巡回相談員1人が各学校を回る[8]。

10月19日の時点では小中学校あわせて15校(小学校10校・中学校5校)を巡回し指導にあたる。指導時間は半日を1回とし、午前の場合8:30~11:30、午後の場合13:15~16:15である。

指導の対象は主に子どもであるが、必要に応じてその保護者の相談にも対応している。

子どもへの指導形態は授業への「入り込み」と、「個別指導」の2つであるが、「個別指導」の方が有効なためその時間は多い。

巡回中の指導内容やその形態、コメントなどが報告書として毎回教育委員会や各学校へ提出される。その例を『平成12・13年度 外国人子女教育受け入れ推進地域中間報告書』(岐阜県大垣市教育委員会, 2001年)より、資料27:「大垣市外国人児童生徒巡回指導記録」として巻末で紹介する。(資料28:「巡回相談員のソフト表」も、参考までにのせておく。)

日本語の分からない保護者は学校に対して不信感を抱いていることもあるので、ポルトガル語での対応が出来ることは、両者(保護者と学校側)の意思疎通に大きく貢献している。

1-4 考察

この大垣市立西小学校で印象に残ったのは、とにかく多くの日本語のための教材があったということだ。「ひらがな」から始まり、「カタカナ」「動詞」「形容詞」「文作り・日記」という様に順に学習していく。国語の教科書を使った学習も目立った。ここで使われている教材のうち、あるものは以前「日本語学級」で教えていらした福田親子先生という方が、大学生の頃(1992年前後)に作成されたものだという。

子ども達は元気に教室に通う様子だが、積極的な子どもとそうでない子どもはやはりいる。はにか

んで自信のなさそうな様子でいる子どももいれば、元気過ぎて少しおうちやくな子どももいる。日本の子ども達のクラスと全く同じだ。

教室で聞こえてくる言語は、先生との会話を除くとポルトガル語がほとんどである。私が見学させていただいた日では、特にトラブルなどはなかった。だが、『平成12・13年度外国人子女教育受け入れ推進地域中間報告書』（2001年、岐阜県大垣市教育委員会）によると、「意思疎通」が出来ないことから来るストレスを抱えている子どもが少なくないようだ。また子ども達が原学級にいる日は不登校気味になる傾向がある。

給食に馴染めない子どももやはり存在する。在籍学校によってお弁当が許される場合もあるが、基本的には皆と同じものを食べる様指導されている。ブラジルの女子に多いピアスは基本的にしないとしていた。納得させるための説明が十分にされる必要があると感じた。やはり日本の子ども達の事を配慮した上のことである。お弁当を持ってくれば、「あの子だけいいな。ずるい」となり、ピアスなども同じであると言う。

しかし、教室を見学していると、子ども達にとってこのような学級がある事は「心のより所」となっている印象を受ける。ポルトガル語でも自分の話を聞いてくれる人・友達がいるということは、しいては「自分の居場所」があるということでもあるからだ。

もうこの学級を卒業してもいい、と判断される子どもも「まだ、ここに居たい」と言うのはその事が大きな原因でもある。また「日本語学級」以外の時は不登校気味な子どもも、「日本語学級」へはちゃんと登校するという。

この教室を担当されている先生の話を見ると、やはりブラジル人の子どもといっても、様々なパターンがあるという。小さな頃から日本に居る場合には、やはり早く日本語を覚え学校生活にも溶け込む傾向にある。だが、そのような子どもはポルトガル語が不十分であり、親とのコミュニケーションが難しくなってしまうりする。

大垣では、主にイビデンの電子部品製造に多くのブラジル人が働きに行っている。出稼ぎのために日本へ来たため、多くの保護者は子どもとのコミュニケーションを犠牲にしながら働いているようだ。保護者が夜勤で遅くなる場合も多く、子ども達が夜遅く外出しても特に気を留めないケースもあると聞いた。その場合の指導も家庭にまで踏み込むことになり、難しい。家庭内での問題（両親の離婚や失業など）も、目立っているようだ。

ただ、公立の学校を委託所代わりに考えている保護者は少ないという。未就学児童・生徒の数は把握していないが、少なくとも公立などの学校に子どもを入れる保護者は教育に関心がある方のようだ。

大垣のこの「日本語学級」に限らず、遅くに日本に来た子どもは日本語や日本の学校生活に抵抗を多く感じ、原学級の方への欠席が目立つ場合もある。子どもの来日状況や家庭での様子を早い段階で把握し、それを考慮したうえでの指導も必要であると感じた。

相談員は各学校を回れるのは月に2～3度程度なので、学習指導や生活指導などのためにはもっと回数を増やすべきだといえる。が、予算の問題でそれは難しいということだった。

2. 愛知県豊田市立東保見小学校

2-1 東保見小学校の概要（平成13年5月8日現在）

住所：〒470-0353 愛知県豊田市保見ヶ丘4-5

在籍児童数：387人（男子212人・女子175人）

在籍外国人児童数：83人（男子41人・女子42人）

ブラジル人児童数：70人（男子34人・女子36人）、ペルー人児童数：8人（男子4人・女子4人）

フィリピン人児童数：4人（男子3人・女子1人）、中国人児童数：1人（女子1人）

愛知県豊田市には、主に自動車工場などで働くブラジル人労働者が多い。第3章で見たように、2001年の各都道府県に住むブラジル国出身の外国人が一番多く住むのは愛知県であった。また、資料「都道府県別日本語指導が必要な外国人児童生徒数・学校数」を見てみると分かるように、日本語指導が必要な外国人児童・生徒が最も多く住んでいる県も、この愛知県で、2328人である。(この資料は1999年：平成11年の資料であるが)

さらに愛知県で一番多く住んでいる外国人の国籍を調べると、同じく2001年(平成13年)では1位が韓国・朝鮮で47788人。2位が47561人でブラジルであった。(資料：2001年都道府県別・国籍別年末現在外国人登録人員、法務大臣官房司法法制部『出入国管理統計年報』第40《平成13年版》より) よってこの愛知県の外国人児童の多くがブラジル人であり、その数も全国では最も多いことが予想される。そのため、今回のこの「教育現場の取り組み」の比較対照の対象校として豊田市の小学校を考えた。

平成13年4月に行われた岐阜大学・留学生センター主催のセミナーで、保見団地で日本語を教えるボランティア活動をしている愛知県立大学の学生と知り合うことができた。彼女のお姉さんが東保見小学校の先生であったこともあり、豊田市立東保見小学校の教務主任である森川先生に紹介していただくことができたため、今回の訪問(平成13年5月24日)が実現した。この東保見小学校では、教務主任森川先生、ペルー人の指導員・大域流唯さんにお話を伺えた。

2-2 日本語指導の組織

(1) **ことばの教室**：豊田市の機関で東保見小学校から独立したものであるが、当小学校の1階の教室で行われている。豊田市の外国人児童向けに、小学校へ通うために必要な日本語のトレーニングを行う。

(2) **日本語指導**：東保見小学校の機関。ことばの教室を終えた子どもで、原学級に籍は置いているが、なおかつ日本語の指導を必要性がある場合に「取り出し」の形で行われる。教育相談も行われる。

(3) **国際学級A**：同じく東保見小学校の機関。やはり「取り出し」授業で、国語(日本語)・算数を教える。少人数制である。Aクラスではその子どもの所属する学年よりも1下の学年のレベルの科目を主に教える。

(4) **国際学級B**：Aクラスと同様だが、Bクラスではその子どもの所属する学年とほぼ同じレベルの国語(日本語)・算数を教える。

豊田市立東保見小学校の外国人児童の数は平成13年5月8日現在、全校児童の21.4%をも占めている。(資料「豊田市立東保見小学校・平成13年度(2001年)在籍児童数、5月8日現在」より) この数字は外国人児童が国へ帰ったり、また日本にやってきましたりと週単位で刻々と変化する。このように多くの外国人児童のために、「国際学級」というクラスが東保見小学校には存在する。

現在、国際学級は3クラス存在し、日本語がよく分からず、原学級での学習が困難な児童に日本語(国語)案数の指導を行う。外国人児童の実態としては、原則的には簡単な日本語の会話、ひらがな・カタカナの読み書きができない児童はいない。が、在日歴に関係なく、児童によっては原学級での学習が困難になってきている。

このような状況に対応すべく、東保見小学校では「ことばの教室」「日本語指導」「国際学級」の3機関によって外国人児童(大多数がブラジル人児童だが、ペルー人児童も対象となっている)たちの日本語指導にあたっている。それぞれは、児童の日本語能力によって分けられ、週に1回の国際会議でそれぞれの児童の情報を交換し、共通理解に努めている。また、このクラスの編成は年に5回行う。また4年生から6年生まではポルトガル語を忘れないために「国際学級」で週に1~2時間、その学習を行なっている。この「国際学級」と「日本語指導」の先生方は全部で6人である。(資料「平成13年度(2001年)国際教室時間割1学期1次案」)

(5) 日本語指導を受ける子どもたち

「ことばの教室」には現在18人が所属している。そのうち、15人が東保見小学校児童で、15人中14人がブラジル人児童、1人はペルー人児童である。ほとんどが日本語を知らずに来日するために、まず「ことばの教室」で日本語の学習を受ける。来日したあとの親に伴った転勤が多く、児童の入れ替わりは激しい。転校の手続きなどをせずに転校してしまう場合もある。日本語の指導がもう必要でないと判断された子どもでも、教科等で何らかの問題を抱えていることが多いという。「国際教室」でその点をカバーしている。日本の学校生活への援助もここで行われている。子どもの転入学は激しい。1ヶ月間で編入・転入をする児童は16名にも上っている。(資料「豊田市立東保見小学校在籍児童数」の「転入・編入児童名」)

(6) 「ことばの教室」の実態

東保見小学校には国際学級のほかに、去年9月から豊田市の組織として、外国人児童に対する日本語の指導を行う「ことばの教室」が置かれている。この東保見小学校とは基本的に違う組織(豊田市教育委員会の組織)であるが、教室には親が送り迎えをするので、実際にここに通う子どもたちは東・西保見小学校の児童がほとんどである。

現在では18人が在籍している。(15人が東保見小学校児童)東保見小学校の児童は1時間目から3時間目までを、このことばの教室で日本語の指導を受け、4時間以降、給食、そうじ5時間目等は原学級へと戻る。1日のうち3時間までとしているのは、原学級で友達ができるようにすることや、学校の生活(給食・そうじ)に少しでも早く慣れるようにという考慮のためであり、1日3時間以上の日本語のトレーニングを必要としている児童はもちろん多い。だが日本人の子ども達との触れ合いを通し、学校生活に早く慣れるようにと、このような時間割をとっている。

ことばの教室には現在、室長(不定期・退職された元校長先生)1人、日系ブラジル人教員(常勤・1～3時間目まで)2人、巡回の相談員(1週間に3,4日)1人が指導にあっている。

(7) 国際学級の実態

豊田市立東保見小学校の、この国際学級に何らかの形で関係している児童は全部で38人である。「ことばの教室」では15人が通っているので合計すると53人、全ブラジル人児童の約80%が関わっている。⁹ もちろん場合に応じて他のブラジルの子ども達への対応は行われる。この国際学級においては1～3人の少人数クラスで指導が行われている。以下、資料「豊田市立東保見小学校・平成13年度(2001年)国際学級の運営について」から抜粋する。

ねらい：外国人児童が、言葉がわからないことや日本の生活習慣になじめないことからくる、学校生活に戸惑う精神的な不安を解消するために、日本語指導・学習指導・生活指導などを行い、日本人児童と共同して充実した学校生活を送れるようにする。

指導の基本方針：原学級での学習困難な児童に、国語・算数の指導を行う。この場合、国際担当者と原学級担任で話し合い、学習の目的・内容・期間等を明確にした上で指導する。少人数での指導を基本とし、きめの細かい指導を行うようにする。母国語を忘れないために、ポルトガル語の指導も行う(4～6年)。外国人児童の生活上の悩みや精神的なストレスを解消するための指導を行う(教育相談)。国際担当者と原学級との連携を深めるようにする(授業参観、話し合い)。

国際学級で指導するクラス：基本的に4つの教室で低・中・高学年、日本語指導員による指導に分けて指導するが、事情によってはこの区別なしに指導する場合もある。基本的に各学年、各教科でAクラスとBクラスが存在するが、例えば2年生の国語A、3年生算数B、4年生算数Bクラスは無い。

日本語(国語)指導：

日本語一日本にきて間が無く、基礎から指導する必要がある児童、ポルトガル語を交えて指導することで効果があると思われる児童のためのクラス。

国語A—原学級の指導から離れて、児童の能力に即した指導を行うクラス。

国語B-原学級の指導を考慮したクラス。

算数指導：

算数A-原学級の指導から離れて、児童の能力に即した指導を行うクラス。

算数B-原学級の指導を考慮した指導を行うクラス。

ポルトガル語の指導：4～6年のブラジル人児童を対象とする（週1～2時間程度）。

3-3 考察

まず驚いたのが、やはりブラジル人児童数の多さであった。資料「豊田市立東保見小学校・平成13年度（2001年）在籍児童数、5月8日現在」を見ても分かるように、全児童数の約21.4%を占めている。外国人児童数にしてみれば、約84%がブラジル人児童なのである。

豊田市保見団地のブラジル人の多さから考えれば当然の人数であるが、本当に多くのブラジル人児童が生活していた。また、ブラジル人児童の特徴とも言えるべき、転・編入学の多さにもびっくりした。親の来日目的であるデカセギに伴う転勤で、1ヶ月にして約16人の子どもが転・編入しているのだ。HIRO学園などでは「多すぎて把握していない」という事であったが、これ程までとは思わなかった。

学校での子どもたちは活発に、かつ熱心にプリントに取り組んでいた。「言葉の教室」では私が見学した1時間の授業では、日本語のプリントを中心とした学習であった。個人個人でやるプリントは異なっていたため、3人の指導員（ブラジル人指導員2人、ペルー人指導員1人）が18人の子どもの間を廻って指導を行った。プリントは種類が多く有り、子ども達のレベルに合わせる事が可能なものであると感じた。子どものほとんどは小学校1・2年生であったので、保見中学校に通うという13歳の生徒は居心地が悪そうだった。

教室にはペルー人の子どもは1人しかいなかったが、教師の指導を常に必要とする子どもであったので、ペルー人指導員は彼につきっきりで教えていた。ペルー人指導員とブラジル人指導員との間では、「指導のやり方」が相違する部分もあるようだが、それについての双方の話し合いはなされていないようだった。また、その交流がしにくい雰囲気があった。ペルー人の児童はペルー人指導員が、ブラジル人児童はブラジル人指導員が、という構図が出来上がっているようにも感じられた。ペルー人指導員もブラジル人指導員も双方の言葉は理解しているようである。この問題は、これから外国人児童がますます増加していく中で、新たに問題となってくる事例だといえる。

この東保見小学校に、ペルー人児童はブラジル人児童の次に多い。今回私は1年生のクラスを中心に見学させていただいたが、そのクラスに在籍するペルー人児童Aとの出会いはひどく衝撃的だった。Aはまだ日本に来て間が無く（数ヶ月という話だった）、当然日本語もよく理解できないために1時間目から3時間目まで、ことばの教室で日本語を学んでいる。ことばの教室では18人中17人がブラジル人児童であるが、スペイン語を母国語とする彼の為に、ペルー人の指導員が毎日1時間目から3時間目まで指導に来ている。まさしく彼とマンツーマンの授業を行う。

だが「ことばの教室」にいる時も、それから彼の原学級に帰ったときも、落ち着きが見られなかった。日本語をほとんど理解できないため、それがストレスとなって時には暴力行為につながった。ペルー人指導員がつきっきりで指導をしているのだが、ほとんど耳を貸さない。また、クラス担任の話す日本語にも耳を傾けない。当然、初めて会った私の話も聞かなかった。（スペイン語で話しかけたとしても、それは同じだった。）

このような状況は、そのレベルが特殊であるようだが、状態としては珍しくは無いと現場の教師は言う。子どもの経験する言葉の壁、文化の衝突やストレスが上手く処理されず、子ども達なりにひどく苦しんでいる。実際には、始めて子どものストレスが引き起こす暴力行為を目の当たりにしたが、私・河田にはひどく衝撃だった。そして、このように苦しむ子ども達のために、将来、何かの力にな

りたいと強く思った。

「国際学級」では2年生・国語Bクラス（2人）、4年生・国語Bクラス（1人）、6年生・ポルトガル語クラスを見学することが出来た。2年生国語では、チャイムと同時に2人のブラジル人児童が、手に国語の教科書・ノート・筆箱を抱えてクラスに駆け込んできた。最初に漢字の読み方の復習をしたが、日本人の2年生の子どもたちと変わらないくらい、楽しそうにすらすらと読んだ。他のクラスの子ども達も、皆打ち解けた様子で伸び伸びと学習をしていた。

この時間はブラジル人の子ども数名と教師のみの少人数のクラスであるので、子ども達のレベルに柔軟に対応する学習が出来る環境にある。同時に、その時間に教師は子どもの様子に気がつくことも可能である。子どもも悩みを打ち明けやすいようだ。この他日本語を取り出し形式で教える「日本語指導」があるが、これは見学出来なかった。

日本語を学習する「ことばの教室」を卒業し、そのまま原学級に行くのではなく、さらなる「日本語指導」や「国際学級」のような教科に力を注げる少人数のクラスがあることは極めて有効である。日本人教師と子どものコミュニケーションをとりやすく、また自分を理解してくれる人の存在を子どもは実感することができる。

自分の居場所を見つけ、落ち着いて学校生活を送り、日本人の子どもたちとも打ち解けて生活している。これは、ブラジル人あるいはペルー人児童の在籍するクラスで、クラス担任が様々な受け入れに当たっての日本人児童への指導を行っている事も大きな要因である。

このように、ブラジル人やペルー人の子ども達の学習意欲・学校生活に対する姿勢に大きく影響する、「様々な形で子ども達に多くの教師が関わる事」や「様々な学習形態がとられている事」の重要性・必要性を改めて実感した。

またこの東保見小学校では、本当に多くのブラジル人児童が在籍していた。12時から12時半まで、ブラジル人の教師が職員室の電話の前に座り、保護者からの電話を受けるというシステムもあった。学習形態や学習・学校生活の援助の多様さに驚いた。

3. 岐阜県岐阜市立黒野小学校

3-1 黒野小学校の概要

教職員数：41人

在籍児童数：721人 23学級、在籍外国人児童数：36人（2001年・平成13年時点）

岐阜県岐阜市立黒野小学校には、ブラジル人児童が特別多いという訳ではなく、外国籍の子どもの出身国は多様である。ブラジル人児童の教育について考えていく中で、ブラジル人児童のみではなく、多くの国の子ども達が通う「アミーゴ学級」についても、比較対照としてとりあげたいと思う。岐阜市の中では、最も多くの外国人児童が黒野小学校に通っているという。そのため、この黒野小学校では外国人児童の適応指導を図るための国際学級・「アミーゴ学級」が用意されている。アミーゴ学級については、2000年度の卒業研究論文・桜井宏美「小学校における国際理解教育～外国人児童の指導～」と、その資料（岐阜市立黒野小学校提供）を参考にまとめる。

3-2 「アミーゴ学級」（外国籍等児童日本語指導学級）

（1）教師数と生徒数

アミーゴ学級は外国人児童を対象とした学級であり、生活適応を図ったり、学習適応の援助を行っ

たりする。岐阜大学の留学生の子女が多く、アジア圏出身の子どもが多いのが特徴である。外国人児童のカルチャーショックを和らげ、日本の学校生活に適應するようにするために、児童の国の文化を理解し、その文化的背景に十分考慮した指導が日本語で行われている。

アミーゴ学級には一人の先生が担任をされている。子どもの数は下の表（2001年・平成13年度）に表したとおりであるが、保護者の都合での転入学は多い。1年間で4人の子どもが退学している。（入学人数は不明）

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年
人数	6	11(3)	3	6(1)	5	1	32(4)

() 内は帰国等で去校した人数

国籍	中国	ブラジル	スリランカ	インドネシア	リトアニア	イラン	中国帰国児童	ネパール	ベトナム	フィリピン	バングラディッシュ	オーストラリア
人数	8 (1)	4	3(2)	3	1	1	7(1)	1	1	1	1	1

3) 時間割

時間割は指導形態によって異なるが、基本的に取り出し形式である。朝から夕方までずっと授業を行うという形ではない。形態別の指導時間・方法は次の通りである。

<個別指導>日本語理解が十分でない児童を学級の国語の時間に合わせて抜き出し、アミーゴ教室で個別授業を行う。来日して間もない頃は、週5時間程度で行い、日本語の獲得状況に合わせ、個別時間を変更している。

<アミーゴ>週に1時間（放課後）同学年の外国籍児童がアミーゴ教室に集まり、1週間の生活の様子を報告したり、国語や算数の学習理解状況を確認したりする。

<T.T>外国籍児童が所属する学級に入り、学習内容理解のため援助を行う。

<母国語指導>市の教育委員会から派遣される外国籍児童生徒日本語指導対応指導員（今年度は中国語・ポルトガル語・タガログ語の先生に来ていただいている）に、日本語や母国語の指導をお願いしている。（毎月1～2回の訪問がある）

1) 指導内容

生活適應について：日本の文化（学校生活や年中行事など）を学ぶ。友達関係や在籍学級、家庭や地域での生活で困ったり悩んだりしていることを聞き、問題の解決を図る。家庭との連携を図る。（アミーゴ保護者会、学校からの文章の翻訳など）

学習適應について：日常会話の指導→あいさつや自己紹介、日常会話の練習、身の回りのものの名前の獲得、1週間の生活の様子を、話したり書いたり出来る。；読み書きの指導→ひらがな、カタカナ、漢字の読み書き、濁音、半濁音、拗音、促音。助詞の表記の仕方の練習、視写、聴写。幼児向けの簡単な絵本や教科書の音読、短文作り、日記、作文。在籍学級で学習している内容の補充（主に国語と算数）

3-3 外国籍および中国帰国児童・生徒対応指導員

岐阜市の教育委員会では、外国籍の子ども達を対象にした指導員を派遣している。教育委員会の資料「外国籍及び中国帰国児童・生徒対応指導員の学校訪問について」によると、指導員の訪問日数は全部で245日とされており、各学校へはつきに1～3回の訪問になっている。また、この訪問回数は児童の状況により変更される。（例えば編入直後は多く、慣れてきたらゼロということもある。）

訪問時間は午前9：00～12：00、午後が1：00～4：00で、ポルトガル語、中国語、スペイン語、タ

ガログ語を話す指導員である。指導内容としては次「児童・生徒の情緒解放、悩み相談」「日本語指導」「担任の補助」「保護者への連絡」「翻訳等」の5つが挙げられている。指導形態は、授業中に入って指導・援助をしたり、別室で個別指導を行う場合もある。ただ、この指導形態については各学校ごとで児童の状態を考慮した上、話し合いを持って決められるようだ。

3-4 考察

アミーゴ学級の日本語指導は、多いときで週に5時間ほど行われる。つまり1日（もしくは半日）ずっとそのアミーゴの学級にいる、という事はない。基本的に日本語の指導が必要とされる子どもであれば、どの学年の子も「国語・社会・道徳」の時間を利用してアミーゴ学級で日本語の学習をする。また、困ったことが無いかという相談や、場合によっては教科の勉強を行うこともあるようだ。日本人の子ども達との生活を基盤に自然に子ども達が日本語を学習する、という形が望ましいとしている。

またここでは、教材を使って机に向かい勉強するというよりも、体験したり活動したりすることで日本語を覚えていく。国語の教科書などはほとんど使わないという。唯一使っているものは、文部省が発行している「にほんごをまなぼう」というものだという。学校の中を探検したりして、会話をしながら学んでいくことのほうが多い。こういったことが可能なのは、おそらく在学している外国人国籍の子ども達のほとんどが、日本語をある程度話す子が多いからではないか。教科書やプリントなどの教材を使わず、会話を中心に日本語の学習を終えるのは、なかなか難しいからである。

在籍している外国人国籍の子ども達の保護者の大多数が岐阜大学の留学生であり、子ども達は小さな頃から日本に住んでいる傾向にある。また滞在は、留学生の卒業に合わせ3～4年というパターンだという。「日本語どころか、岐阜弁まで話す子どももいた。」(桜井, 卒業研究)とあることから、子ども達の日本語習得度合いは高い。よって、小学校へ上がる前の保育園での生活で日本語をある程度自然に身につけている子どもが多いことが予想される。保護者もある程度の日本語が理解できている。デカセギのために来日したブラジル人労働者の子ども達との違いは、このようなところに存在する。また子ども達の転・編入学は多いとは言っても、1年に4人とどまっている。豊田市立東保見小学校のブラジル人児童では1ヶ月で16人の転・編入が数えられている。

4. ブラジル政府認定ブラジル人学校HIRO学園

1) HIRO学園の誕生

現在(2000年3月)、大垣の人口は153529人。うち、外国人総数は4763人。電子部品関連企業で働く外国人が多い。ちなみに16歳未満のブラジル人は507人で去年よりも116人増加している。

大垣市内の保育園や小学校・中学校を見ると、保育園にあたってはすべての保育園に、小学校・中学校では1校を除くすべての小学校に外国人児童・生徒が在籍している状況である。大垣市内のそれぞれの在籍人数は、同章第3節1の岐阜県大垣市立西小学校のところで紹介しているので参考にして欲しい。

* 保育園・小学校・中学校での園児生徒数()内は日系ブラジル人

	1993年12月1日	2000年5月1日
保育園	21 (20)	59 (41)
小学校	14 (9)	122 (95)
中学校	4 (1)	48 (30)
合計	39 (30)	229 (166)

大垣国際交流協会機関紙「フレンドリー」より

そのような状況の中、1999年9月に日系ブラジル人の子どもを対象にした保育園「KODOMO LANDO」が、そして2000年4月にブラジル人学校「HIRO学園」が設立された。いずれの施設も現学長である川瀬光弘さんが立ち上げられたもの。川瀬さんは大学で児童教育を学ばれ、卒業後幼稚園の先生として6年間を過ごされ、その後家業の不動産業を継がれた。不動産業の傍ら、いつかまた教育の分野に携わりたいと言う夢を持ちつづけていた。

1999年、知人の日系ブラジル人女性が運営していた託児所を引き受け、その延長上として「HIRO学園」が誕生した [10]。HIRO学園では学長の川瀬光弘さんと、教員である岡崎まみさんにお話を伺うことが出来た。(資料「HIRO学園案内パンフレット」)

2) 子どもの数

日本にブラジル政府認定の学校は「HIRO学園」を含めてわずか3校しかない。(他に群馬県太田町、静岡県浜松市、愛知県豊田市) ブラジル政府から認定される際(2001年12月4日)はブラジル人のみではなく、ブラジル以外の南米の子どもたちも受け入れるよう、要請されている。が、現在のところブラジル人以外の南米の子どもたちは在学していない。

2001年現在、0歳児から15歳まで、約190人の子どもたちが学ぶ。今春より高等部も設立された。子どもたちは大垣在住のみならず、滋賀県から通う子どもたちも多い。今現在、小牧、稲沢、各務原、羽島を円とした地域から多くの子どもたちが学園にバスで登校する。よって、5台のバス、2台のワゴンが学園が所有している。子どもたちの親の多くは経済的な理由から車を所有しておらず、そのため子どもたちの多くはバス通学が主流となる。

*子ども数 (2001年2月27日現在)

年齢	0~1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
人数	11	5	8	14	15	30	34	7	11	8	15	8	15	8

HIRO学園川瀬学長より

表より、5歳、6歳、7歳児が多いことが分かる。働き盛りの親が多く出稼ぎにきていることが言える。そしてまた、大きな特徴として子どもの転・編入が頻繁である。デカセギという親の最たる目的のため、2週間たらずの短期間で国へ帰ってしまう子どもや1週間で他県へ引越する子どもも少なくは無く、「把握できません」という学長さんの言葉からもその変動の大きさが分かる。

3) 教員数

教職員は、教員、バスの運転手、給食員をふくめ、全部で19人。うち、ブラジル人は14名、日本人は5名であり、日本人でもポルトガル語を勉強中。ある程度は話すことが出来る。ブラジル人の教師の中には、ブラジルで校長をしていたという女性や、同じくブラジルで教師をしていたという男性もみえる。全国で行われる様々な研修に、積極的に参加をされているようだ。

4) HIRO学園の一日

朝は9時から3時までで、午前中に45分授業が3時間、午後にも45分授業が3時間ある。給食を合わせた休み時間が1時間15分あり、この間子ども達は家から持ってきたおやつを食べることが出来る。授業後15分間は、驚いたことに掃除の時間があるが、これはあまり機能していないようだ。

バスは15時、17時、19時に学園を出る。共働きが常識のブラジル人家庭のため、子どもたちは朝早くから夕方遅くまで学園にいる場合が多い。よって、学園が準備する食事は朝・昼・夜の3食である。すべてブラジル料理であった。

授業が始まるのは9時からだが、学園の門は朝6時30分に開き、夜は20時に閉まる。土曜日でも課外授業を行う場合が多い。日本でいう、小学校高学年から中学生の子どもたちはサッカーに熱中しており、揖斐川の河川敷にあるサッカー場でよく練習をする。日本人の子どもたちとのサッカー交流試

合もこれまでいくつか行われた。

5) 授業内容・HIRO学園における授業カリキュラム

HIRO学園の教育方針は「愛」。ブラジル人にはカトリックが多いが、学園ではそれらは一切関与していない。すべてブラジル式の教育がポルトガル語でおこなわれており、ブラジルで使用される教科書を使っている。子どもたちがブラジルに帰国した際には、日本で在学しているそのままの学年のクラスに(テストもなく)入ることが出来る。が、ブラジルには無い教科である、「音楽」と「日本語」「芸術」はHIRO学園独自のカリキュラムである。(資料「HIRO学園の時間割・学校経営全体構造」)

子どもの来日ずれより起こるレベルの違いを考え、日本語の授業は初級と中級に別れており、週に2時間行われる。日本語授業を行っているのは、日本のブラジル政府認定学校でHIRO学園のみである。日本語教育はもちろん、彼らにとって第2外国語にあたり、授業はもちろんのこと、ふだんの生活もポルトガル語を使用している。子どもたちにとって最も恐怖である落第制度ももちろんあり、1年である4期を終えると教師が会議を開き、留年する子どもたちを決定する。

6) HIRO学園に通わせる親たち

一般に、出稼ぎにくるブラジル人たちは、一時的な滞在のつもりで来日する。「教育の先送り」を考える親が多い。だが、思うように来日の目的が達成されない場合、定住化しざるをえない経済的状況になっている場合も多い。

だが、これらの親はいずれ、国へ帰るという将来像を持っているようだ。なぜなら、国へ帰ってからも子どもたちが困らないようにと、HIRO学園のようなブラジル政府認定学校に子どもたちを通わせているからである。

中には子どもが学校でいじめられた事が原因で、多くのブラジルの友達がいるブラジル人学校へ通わせたりする場合もあるが、どちらにせよ、いずれはブラジルへ帰るという思いがある。

ブラジル政府認定を受けているおかげで、子ども達はブラジルへ帰ってからもテストなしで所属していた学級に入ることが出来るメリットがある。このメリットのため、それまで美濃加茂などでブラジル学校に通っていた子どもがHIRO学園に移ってくるケースもあったという。

だが、HIRO学園は私立学校である。ブラジル政府からも日本政府からも援助を受けていないこともあり、公立学校よりも月謝が高い。このような学校に兄弟で通わせている家庭は、おそらく来日本来の目的であった「出稼ぎ」を達成することが遠のく。親の中で、このようなジレンマは日常的に存在すると考えられる。

7) HIRO学園の交流行事

(1) 2000年6月17日 大垣市安井小学校『オーレ! オーラ! アミーゴス・イン・安井』

主催: 安井小学校PTA, 場所: 安井小学校体育館, 参加者: 学園に通うブラジルの60人の子どもと安井小学校児童約600人, 安井幼稚園児約70人と父母ら。内容: 大垣市内のライブハウスを拠点に活躍するバンド「ジラソワ」など、日系を含むブラジル人演奏グループがサンバやボサノバなど、本場の演奏をし、ダンスも披露。音楽は両国語で解説され、子どもたちは陽気な音楽を堪能した。(2000年6月18日付け 中日新聞西濃版)

(2) 2000年7月22日 岐阜経済大学『トウモロコシ収穫』

主催: 岐阜経済大学「土まるけネットワーク (TMN) 促進委員会」(農業体験ツアーの普及を目指す学生グループ), 場所: 揖斐川町親子ふれあい農園「モロコシ村共和国」, 参加者: 学園小学2年生から中学2年生まで約40人と「土まるけネットワーク促進委員会」学生, 内容: 約150株のトウモロコシの収穫を体験。昼食時にはゆでたトウモロコシと学生らが準備した流しそうめんを味わった。

(3) 2000年10月 荒岬小学校『お菓子作り・ダンス』

主催: 荒岬小学校(代表 増田芳子教諭), 場所: 第1回 荒岬小学校家庭科室, 第2回HIRO学園,

参加者：学園3年生児童約40人と、荒崎小学校3年生児童約40人、内容：合同でお菓子作りやダンスを踊って交流する

(4) その他：地元大垣サッカー少年団との交流試合も頻繁に行われている。

7) 考察

始めてHIRO学園を訪問したのは、2001年2月17日だった。子ども達は全体的にひどく明るくて、人懐っこく、生き生きと生活をしている。すべてブラジル式の学校なので、学校や教室の中にいる時はやはり日本にいる気がしなかった。日本の小学校とは雰囲気も全く違い、どこか、スペインの小学校と共通するものがあったように感じた。

教師達と子どもの距離も随分近いように感じた。また教師と子どもの保護者との連携も上手く行っているようだ。公立の学校では、いくらかの保護者が学校に対し何らかの不信感を抱いているようだ。それは当然言葉の壁によるものや、教育の違いなどが原因であるのだが、それはこのHIRO学園の場合には全く認められない。

HIRO学園の月謝・教材費が、日本の他の私立学校と比べても大差は全く無い。だが、先にも述べたように経済的な援助がどこからも得られていない状況や、入学する子どもたちの人数変動の激しさから考えると、経営は楽ではない。

さらに、月謝を決められた期日までに収めるのは保護者全体の約60%で、のこりの40%はその月謝が滞ったり遅れたりの状態である。また、子ども達の両親の経済状況を考えても、出稼ぎにやってくる状況で毎月月謝を出しているのは、決して楽なことではない。現実問題として、HIRO学園では教師の月給が遅れることもあったり、学長自らバスを運転している状況である。

このブラジル政府認定となったHIRO学園の存在は、日系ブラジル人のネットワークを通じて多くのブラジル人に短期間に知れ渡ったという。子どもを抱える日系ブラジル人労働者にとって、自分達の将来に対し、「帰国する」という何らかの計画や将来像を抱いていた場合、このHIRO学園の存在は大きな希望であったといえる。

事実、両親の抱く「将来像」や「見通し」によって、子どもの生活は大きく変化する。日本で暮らしていくという見通しを持つ親であったならば、子どもは日本の公立学校に通うことになる。一方いずれはブラジル帰国する、というのであれば、子どもはブラジルの教育を受けることの出来るHIRO学園のようなブラジル人学校に通う。もしくは、学校には行かない場合もある。いわゆる「教育の先送り」である。

「教育の先送り」を求める親達が日本の学校に子どもを入れたとしても、それは子どもを誰もいない家に置いておくのが不安であるからだ。また経済的にも、ブラジル人学校に入れるよりもはるかに公立の学校のほうが安い。どこか託児所のような役割を求めている場合がある。

だが、こういった親達はいずれブラジルで本格的に子どもを教育させたいと考えている。先にも見てきたが、ブラジルでは公立の小・中学校よりも私立の学費の高い学校の方が、その教育のレベルは高いとされている。「教育の先送り」を望む親達は、おそらくその私立の学校に、日本で貯蓄したお金を使い、子どもを通わせたいと考えているようだ。

だが、実際に日本経済の不況の波を受け、親の思うように貯蓄が出来ない場合が多い。「もうあと少し」の滞在が、結果的に長期の滞在、しいては「定住化」につながり、子ども達は中途半端な生活を送ることになるのである。

しかしここで注意しなければならない事は、「研究<教育と社会> 第8号1998年」(高橋幸恵、一橋大学院博士後期課程)が述べているように、このような状況下では「教育の先送り」は「父母の無関心」と対応するものではない、という事である。

ただ、この場合の「教育の熱心さ」が、日本の学校の求める「教育の熱心さ」とは異なる、という事なのである。とはいえ、親の合理化されたそのような意識の中で、子ども達に未・不就学者やボル

トガルも日本語も話せない子ども、学習機会を得ることの出来ない子どもが増えているのが現状だ。

そのような状況を救いつつあるのが、このHIRO学園であり、学園に通う子ども達もその保護者達もいくぶん落ち着いて生活を送っている。このような学園に対し、日本は援助をしていく必要があるのではないか。全く（ブラジルからも）援助がない状態は、やはりおかしい。

中には日本の学校に対する不信感や、いじめなどを巡ったトラブルから「逃げ」たり「追い出された」りした子ども達もいる。そのような子どもを作りだしてしまった事も大きな問題だが、その子どもたちが学ぶ場を、さらに圧迫する事はどうしても避けるべき事である。

結論 ブラジル人児童の教育と今後の展望

1 各学校・学園の比較

各学校の見学とインタビューは、実際にこの地域でどのような取り組みをされているかを体験的に知ることにおいて、ひどく有効であった。どの学校・学園でも言える事は、先生方が本当に熱心に、また切実に子ども達にとっての教育を考えているという事だ。そしてその役割の必要性を改めて実感した。

ここでそれぞれの学校での取り組み方を見ていくが、まず「岐阜県大垣市立西小学校」と「愛知県豊田市立東保見小学校」を比較する。各学校にブラジル人（ペルー人）の子ども対象の日本語を学ぶ学級があるからである。それぞれ、市の独自事業であり市の教育委員会の下で行われている。対応の取り組みでの面で、どういう点で、どう違い、どちらが有効かを探る。また、そこに在籍し学習している子ども達・保護者の姿も、見学やインタビューから分かる範囲で見えていく。

次に、それらブラジル人（ペルー人）の子ども達を対象にした取り組みをしている学校と、「岐阜県岐阜市立黒野小学校」を比較する。この黒野小学校には外国人児童対象の学級があるが、そこに在籍する外国籍の子ども達の出身国は多様である。ブラジルの子どもの対象にした学校の取り組み方と同じなのか、また違うとしたらどこが、どう異なるのかを探る。

最後に岐阜県大垣市のブラジル政府認定ブラジル人学校「HIRO学園」と、日本の公立小学校に通う子ども達を比較する。子ども達の教育や生活の様子、それぞれの抱えている問題について出来る限り実例に沿って見ていきたい。

1) 「岐阜県大垣市立西小学校」と「愛知県豊田市立東保見小学校」

(1) 大垣市の「日本語学級」と豊田市の「ことばの教室」

この2校には、各市の教育委員会が独自事業としてブラジル人・ペルー人の子ども向けの日本語を指導するための学級が用意されている。大垣市では「日本語学級」、豊田市では「ことばの教室」である。それぞれ、各市に在住するブラジル人とペルー人の子どもが通ってきている。だが、圧倒的にブラジル人が多く、現状はブラジル人児童向けの教室となっている。

どちらも市内からのブラジル人児童が通う教室で、子どもの転入学が短期間に頻繁に行われるが、その子ども達の住居の集中度が異なる。先にも見たように、豊田市の場合は巨大なブラジル人集住地・保見団地に多くのブラジル人が住んでいる。よって、「ことばの教室」に通う子ども達の多くはこの東保見小学校のある、保見団地に住んでいるのである。

東保見小学校に在籍するブラジル人の数も70人と、全校児童数の約18%に当たるが、その変動は「デカセギ」目的の保護者の転勤などでひどく激しい。

一方、大垣市の「日本語学級」に通う子ども達の住む場所は市内に分散しており、在籍学校も資料「大垣市外国籍児童生徒学校別在籍人数」で見た通り、多様である。また、豊田市立東保見小学校に比べて、大垣市立西小学校自体に在籍するブラジル人児童数も少なく、全校児童の約1%である7人で

ある。だが、転入学者はやはりこちらも多い。

このようなことから、豊田市立の「ことばの教室」へブラジル人児童は毎日通い、日本語の学習をポルトガル語で行う。家が近いために毎日の通級が可能であり、毎日の通級により集中的に日本語を学習することが出来る。また親の送り迎えもそれ程難しくは無いという。

一方、大垣市内に分散している子ども達は週に1度、大垣市立西小学校の「日本語学級」へ通う。一度在籍する学校へ行き、原学級で朝の会をすませた後に来校するため、公費でタクシーや公用車を使ってやって来る。

両方の学級では使われている教材は大体似ている。プリントによる学習が多いように思える。豊田市の「ことばの教室」では2人のブラジル人指導員と1人のペルー人指導員が、18人の子ども達を受け持っている。

一方、大垣市の「日本語学級」は曜日によって異なるが、2人の日本人教師と1人のポルトガル語通訳が10人弱の子ども達を見ている。日本語を集中的に学ぶという点では、豊田市の「ことばの教室」の方が有効だと感じる。毎日日本語を学習する場合は、週に1度の学習の場よりもその効果ははるかに大きい。

(2) 東保見小学校の「国際学級」「日本語指導」と西小学校の「相談員」

さらに、このブラジル人児童の集中度と人数が、各学校のブラジル人児童への対応の違いを生み出している。どちらも市の教育委員会が置いた日本語指導学級は存在するが、そこを卒業した後の対応を“制度化”しているのは豊田市立東保見小学校で、大垣市立西小学校では存在しない。「国際学級」では、その時間割も毎週更新されている。

つまり、豊田市立東保見小学校では「ことばの教室」後、さらなる日本語指導と教科指導、生活相談を兼ねた「国際学級」「日本語指導」というものが存在する。一方、大垣市立西小学校では「日本語学級」を終えた後は原学級に戻り、必要に応じて担任による「取り出し」授業を行ったり、「相談員」による指導が行われたりする。

豊田市立東保見小学校のように、各学校にブラジル人児童が集中していれば、日本語指導学級を終え原学級に戻った後も定期的・持続的に「国際学級」のような形で指導をすることが可能である。カリキュラムも組みやすくなり、また場合に応じて柔軟に対応することが出来る。

このような東保見小学校の制度化された「取り出し授業」である「国際学級」は、少人数で行われるため、子ども達にとっては非常に学習しやすい環境にある。と同時に、生活上の悩みなども打ち明けやすく、自分の居場所だと感じる子どもも多いようだ。実際に見学することが出来たが、日本人の教師（担任）とブラジル人児童が少人数で向き合い、非常に落ち着いた環境にあった。

在籍する学校の教師と通じ合う時間が1日に1時間はあるというカリキュラムは、子ども達にとって精神的安定をもたらすはずである。さらに「国際学級」では、子ども達へポルトガル語の学習も行っている。4年生から6年生まで、週に2～3時間の授業だというのが、これは子ども達にとっても、その保護者にとっても、自分のアイデンティティーの面で重要な事である。

他方、大垣市立西小学校のようにブラジル人児童が市内の各学校に分散しているので、各学校でのブラジル人児童数がそれ程多くなく、「取り出し」を中心にした定期的・持続的な指導が難しくなる。大垣市立西小学校ではその困難さを、文部省事業の「相談員」や、各学校・学級担任の指導で補っていることになる。また、学校生活の援助などは「日本語学級」の日本人教師も行うが、ブラジル人児童の在籍する学校の教師という訳ではないので、限界があると思われる。さらに相談員は、予算の関係で月に2～3回の訪問にとどまっている。

要するに、豊田市立東保見小学校では「ことばの教室」において、ポルトガル語で集中的に日本語の学習を早く終える。その後「国際学級」というカリキュラムによって「取り出し授業」で子どもとしっかり向かい合う時間を通し、日本語指導、ポルトガル語指導、教科学習・生活の援助をする、と

いうパターンである。同時に原学級での生活も平行して行っている。

大垣市立西小学校では「日本語学級」において、日本語とポルトガル語で日本語を指導し、同時に学校生活の援助も行う。さらに「相談員」によって、各学校の原学級へ戻った後に「取り出し」「入り込み」という形で日本語指導、教科学習・生活の援助を行うものである。「相談員」でも、やはり「取り出し授業」に効果があるということで、その時間を増やしている。だが先にも述べたが、予算の関係で各学校への訪問は月に2~3回にとどまっている。

(3) その他、通学条件など

大垣市ではブラジル人の子ども達を公費で在籍学校から「日本語学級」へ送り迎えしている。このような試みは全国でも珍しいという。他県などではボランティアによる送迎をしているところもあるが、万一の事故のための補償を考え、大垣市ではボランティアによる送迎を避けている。

豊田市の「ことばの教室」に通う子ども達は、基本的に親の送迎が多い。自宅が学校から近いことも大いに関係している。さらに豊田市立東保見小学校では、毎日12時から12時半まで、ブラジル人の先生が職員室で保護者からの電話を受け付けている。その時間に電話をすれば、ポルトガル語で対応するというので多くの親は利用している様だが、仕事時間と重なる場合もあるようだ。

けれどもこの試みは大変いいアイデアだと思われる。このコミュニケーションで、学校に対する不信感を多少なりとも拭えることが期待される。また同時に保護者への理解を呼びかけることも可能である。

このように公立学校では、各自治体によって対応策が様々である。この2校では、ブラジル人児童に対する取り組みを熱心に行っている学校であったが、「自治体の格差拡大・余裕ない学校現場」のように、自治体の予算などによってその対応に格差が出るところも実際にはあるようだ。

2) 「岐阜県大垣市立西小学校・愛知県豊田市立東小学校」と「岐阜県岐阜市立黒野小学校」

(1) 日本語指導について

次に、ブラジル人児童が多く通う学校と外国人児童が多く通う学校を、主に取り組みの面において比較してみる。ブラジル人が多く通う学校は、「岐阜県大垣市立西小学校」と「愛知県豊田市立東保見小学校」で、外国人児童が多く通う学校とは、「岐阜県岐阜市立黒野小学校」である。

岐阜市教育委員会で調査された「外国籍児童生徒及び帰国児童生徒一覧」を見ると、黒野小学校に在籍する外国人児童は29人で、岐阜市内では最も多くの外国人児童在籍数である。(そのうち日本語が必要な児童が16人となっている。)子ども達の出身国は多様なことが特徴である。

子ども達の出身国が多様な事の原因に、保護者の多くが岐阜大学の院生・研究者であるということがある。黒野小学校に在籍している子ども達は、アジア圏から多く来ているという特徴も見られている。そのような状況に対応して、黒野小学校では「アミーゴ学級」という外国人児童の適応指導を目的とした学級を用意している。ここでは学校への生活適応を図る事と同時に学習適応のための援助を行っている。

前にも述べたとおり、大垣市と豊田市には各市の教育委員会の組織として日本語を指導する教室があり、それぞれ大垣市立西小学校と豊田市立東保見小学校に教室がある。前者は「日本語教室」、後者が「ことばの教室」である。「日本語教室」は市内のブラジル人の子ども達が週に1日、「ことばの教室」へは同じく市内ではあるが、団地という狭い範囲から毎日通級する。

人数は変動が激しいのが大きな特徴であるが、大垣市の場合は曜日で平均して10人弱。豊田市では18人になる。教材はプリントを中心としたものを学習習得度合いによって対応できるよう、多く準備されている。

一方、岐阜市教育委員会にはそのような日本語を指導する教室はない。よって日本語指導という面を見てみると、大垣市・豊田市では市として日本語指導を行っているが、岐阜市では各学校ごとで任

されている事になる。黒野小学校でいうと「アミーゴ学級」がその場となる。

アミーゴ学級へは、子ども達は取り出しという形で1人ずつやってくる。通級している人数は、32人である。どの学校でもそうである様に年度途中での編入学者が多いが、把握しきれないほど頻繁という訳ではなく、基本的に3~4年在籍するパターンが多い。

通級は来日して間もない子どもで週に5時間程度であるという。黒野小学校の機関であるため、黒野小学校に原学級がある子どもしか通級しない。基本的に原学級の「国語・社会・道徳」の時間に通級する。

先述の卒業研究「小学校における国際理解教育～外国人児童の指導～」で、「アミーゴ学級」の先生に行ったインタビューを見てみると、日本語指導においては「目で見たり触れたりして、実感しながら学んでいくということを大切にしている」と先生は話されている。また「アミーゴ学級」での教材については「国語の教科書などはほとんど使いません」「学校の中を探検したりして、会話をしながら学んでいくことのほうが多いです」という。

このような体験的な学習は、日本語のある程度の基礎が出来ていないと不可能である。言い換えれば子ども達にはそれまでに日本語に接した経験があり、かつ持続的にも日本語と接しているということである。

先に黒野小学校に在籍する外国人児童の多くは、その保護者が岐阜大学の院生・研究者であるという特徴を述べた。子ども達は比較的低年齢で来日し、3~4年間は日本に在住している傾向にある。つまり小学校に上がる前から保育所に通い日本語に接した経験があったり、また保護者の日本語習得度合いもブラジル人労働者に比べて比較的高いことが言える。以上の事が大きな違いを生み出していると言える。

(2) 大垣市の「相談員」と岐阜市の「指導員」

岐阜市教育委員会では、「外国籍及び中国帰国児童・生徒対応指導員」による学校訪問が行われている。対応言語など、詳しい事は前に記述した通りである。

指導内容は各学校との話し合いの上に決められているが、黒野小学校は「日本語指導」と「母国語指導」を依頼しているようだ。この指導員の訪問は月に1~2度程度であり、母国語指導としては中国語・ポルトガル語・タガログ語が行われている。

一方、大垣市では文部省事業として「相談員」が各学校を訪問する。月に2~3回程度であり、形態や内容はやはり各学校との話し合いで決められるが、母国語指導は今のところ行ってはいない。大垣市では子ども達の母国語の指導は、「学校教育」においては重要性が薄いとされている。¹¹

(3) その他、人数の変動など

人数の変動が明らかに違うことが言える。黒野小学校でも外国人国籍の子ども達の転・編入学は頻繁だとしているが、1年間で4人の転校である。ほとんどの子どもは岐阜大学院生・研究者の子どもであるので、親の卒業に合わせて3~4年は在籍するパターンが多い。

一方、豊田市などのデカセギのために来日したブラジル人労働者の子どもであるブラジル人児童の在籍人数変動は大きい。大垣市立西小学校では、「変動が大きい」とだけで、そのデータが分からなかったが、豊田市立東保見小学校では、わずか1ヶ月間で16人の転・編入が認められている。デカセギに伴う転勤や帰国など、不安定な労働状態が、そのまま子ども達の転・編入学の数の変動に現れているといえる。

3) 「HIRO学園」の子ども達と公立学校に通うブラジル人の子ども達

最後にブラジル政府認定学校HIRO学園と、ブラジル人の児童が多く通う公立学校（岐阜県大垣市立西小学校と、豊田市立東保見小学校）に通う子ども自身について、その生活の様子や学習などの面で比較する。子どもの思いや言葉は、すべて雑談の中で聞き出した言葉である。

HIRO学園は、ブラジル政府認定のブラジル人学校である。ブラジル政府に認定されたブラジル人学校に通っている子ども達は、ブラジルに帰った後も現地の学校でテストを受けること無しに、日本で所属していた学年に編入することが出来る。よって、HIRO学園がブラジル政府認定の学校になった際、それまで違うブラジル人学校に通っていた子ども達がHIRO学園へ編入したという例もある。普通は編入の際には試験を受けることになっており、その試験結果で学年が決められるからである。

HIRO学園に通う子どもの保護者はデカセギのために来日した労働者であるため、朝早くから夜遅くまで仕事をしている。よって学園は子ども達のために、朝6時30分から夜は20時まで開園している。実際に子ども達は多くの時間をHIRO学園で過ごしている。友達と机の上に座って話したり、サッカーをしたり、先生と話をしたり、楽器を弾いたり、思い思いの事をして子ども達は放課後を過ごす。食事3食とれるようになってきているため、3食をすべてHIRO学園でとる子どもも少なくは無い。

HIRO学園ではカリキュラムがすべてブラジルのものであり、授業もポルトガル語で行われる。初級と中級に分かれて週に2時間授業、日本語も学習している。学園の食事子ども達になじみの深いブラジル料理であるし、ピアスや口紅などのお洒落も当たり前にすることが出来る。おやつ時間もあり、多くのブラジル人の友達や先生と生活することが出来る。

ブラジル政府の認定を受けたHIRO学園では、子ども達は2001年現在0歳児から15歳まで約190人の子どもたちが、半径30キロの地域からバスで通って学ぶ。今春より高等部も設立された。だが、やはり在籍する子ども達の転・編入学は頻繁であり、「把握しきれない」という程である。

親のデカセギ目的の来日は、「半強制的」に子ども達を日本へつれて来ただけではなく、日本での子ども達の教育にも大きな影響を受けてきた。HIRO学園に子どもを入れる親のほとんどは「いずれは帰国する」という、どちらかというハッキリした将来の見通しが立っている。だからこそ、公立よりもずっと高い学費を払っても、ブラジル政府認定の学校に子ども達を入れるのである。

HIRO学園で学ぶ子ども達は、やはり日本の学校で学ぶ子ども達よりも伸び伸びとしていたように思う。もちろん、子ども達の中にも色々な悩みを抱えている子どもは多いとおもうが、言葉や文化の違いからくる様々な衝突を一度は公立の学校で経験してきた子ども達がほとんどであったため、よけいに「こっち(HIRO学園)のほうがすごく楽しい。」と言う。ブラジルの友達と楽しそうに遊ぶその子ども達の顔を見ると、その言葉にうなずきもするが、同時にひどく寂しい思いもする。

「日本の学校は厳しい」「友達とけんかして、お母さんがこっちに入れた。こっちではあんまりけんかしない。」と話す子どももいた。ポルトガル語で分かった言葉は、あまりなく、これらの言葉はすべて日本語で語られた。また、日本語を話す子どもに通訳してもらった場合もあった。日本語にあまり抵抗を感じない子どもで、「日本の学校も好き」と言う子どももいた。「勉強するのは同じだし、どっちが難しいという事はない。」とも語った。多くの子どもは饒舌で、人懐っこかった。

けれども「将来」について聞くと、「分からん。」「お父さんがどうするか分からん。」など、やはりブラジルに帰るのか、それとも日本にいるのかは家庭でもはっきりしていないようだ。

一方、大垣市立西小学校や豊田市立東保見小学校に通う子ども達は、家に帰ってから一人である時間が多いようだ。親が帰ってくる時間が遅い(8時前後)ためである。豊田市では「夢の木教室」に行くという子どももいるようだった。またブラジルの友達と一緒に遊ぶ事もあるという。

日本の学校に対してはHIRO学園などのブラジル人学校を経験したことがないため、どちらがどう、と比べる事はできないようだったが、「きらい」という子どもはいなかった。やはり日本語の取得度合いによって、友達や学習の受け入れ状態が変わっているようだ。大垣市立西小学校では、昼休みに外で日本人の子どもと遊ぶ姿も見られた。やはり子ども同士、仲良くなるのは早いように感じた。

公立学校に通うブラジル人の子どもには将来について聞くことが出来なかったが、その転・編入学の多さから見ても不安定な事は確かである。

HIRO学園にしても公立学校にしても、子どもは親のデカセギという仕事の持つ性格で、その教育

や将来が「不安定」「困難」にならざるを得ないと感じた。そんな状況の中で一生懸命に学習・生活し様々な悩みやストレスを感じている子ども達を見ていると、ひどく切なくなると同時に、彼らを受け入れる事の難しさや必要さ、重要さをひしひしと感じた。

2 今後の展望と課題

本論文では1990年の入管法改正に伴い、著しく増加した「日系ブラジル人労働者」の持つ独自性から見た「日系ブラジル人の子どもの教育」について文献や調査を基にまとめた。まず第1-3章ではデカセギ労働者の現状について大枠をカバーし、「日系ブラジル人労働者」の生活や就労の実態を文献や資料、調査をもとにまとめた。次いで第4-5章では、自身の教育現場の調査をもとに、ブラジル人児童に対する3校の教育現場での取り組みを比較した。

「いずれは帰国する」という意識は、多くのデカセギ目的に来日した日系ブラジル人労働者にあることであるが、しかしその帰国の可能性の度合い、つまり「見通し」によって子どもの教育に対する「取り組み」に大きく影響している。高橋幸恵(1998)は、「見通し」軸と「取り組み」軸を交差させた場合に出来る「4つの類型」を発表している。

この分類でいくと第1類型の、出身国に子どもの教育の重点を置くとしている日系ブラジル人労働者家庭は、いくら学費が高くともHIRO学園のようなブラジル政府認定学校に通わせる場合が多い。子どもの教育の重点を日本に置くとしている第2類型の家庭では、日本の公立の小学校に子どもを通わせる場合が多い。

どちらの国に子どもの教育の重点を置くのか定められていない第3類型と第4類型の家族では、その取り組みにもまた変化が現れる。このような子どもの教育の重点を日本で置くのか、それともブラジルに帰ってからに置くのかという将来の見通しは、ブラジル人労働者の就労・経済状態によって大きく異なる。けれども同時にデカセギであるブラジル人労働者の就労状態は、第2章でみてきたようにひどく一時的なものであるため、子どもの教育の見通しが立ちにくく、しかも不安定であることがここからも分かる。

子どもの教育について、多くの親が不安定な見通ししか持っていない事実を、「教育に対する無関心」とされる場合がある。現実はそのように不安定にならざる生活の現状があることは第2章で見てきたとおりであるが、不安定な見通しの中でも、その時なりの将来像への取り組みは親なりに行っている。

このように親の持つ「将来像」や「見通し」によって、大きく子どもの教育の場や時間、質が変わる。費やす費用も違う。HIRO学園と他の小学校を比べてみれば明らかなことである。早い段階で子どもの親の意識や家庭での様子を把握することが、教師にとっても望ましいが、実際にそのように見通しが立ったとしても、それが変化したり不安定な時期を送る事は珍しくは無い。

その事を証明する事実として、大垣市教育委員会の澤田さんが言われた次の現実が挙げられる。HIRO学園が出来て2年になるが、学園に通い始めていた子どもが公立の学校にまた戻ってきている、というのである。目立って多い、というわけではないようだが事実である。この理由としては帰国の見通しが立ち子どもをHIRO学園入れたのはいいが、実際には思うように行かないまま時間が過ぎ、その間の学費が親の負担になってきているのではないかと。

このようにブラジル人労働者の不安定な就労状態や、それに伴うブラジル人の子ども達の「将来像」の見通しの不確かさは、おそらくこれからも続いていくことが予想される。よって、公立などの学校では、そういった生活の状況理解・考慮した指導が望まれる。そのための日本語学習の多様なカリキュラムや、子ども・保護者との意思疎通に一層努める必要がある。

また、HIRO学園のようなブラジル政府の認定を受けたブラジル人学校への援助を国が行っていくべきである。不安定な中でも、ブラジル人労働者やその子ども達に、自分達の持てる範囲内での

「将来像」に即した教育の場の選択をする権利があるはずである。

本論文では第3章において、愛知県豊田市保見団地と大垣市におけるブラジル人との「共生」への試みをとりあげた。その中で言葉の壁、習慣の違いなどから生まれる誤解や差別感などの「負の感情」が外国人労働者排除にもつながる危険性を示唆したつもりである。

このような非常に複雑で込み入った感情から出来上がってしまった「溝」を、素直な感情を持って埋めてくれる存在が「子ども達」であるとした。小さなうちから「共生」について肌で学び、頭ではなく体で相手を理解し接して行くことが出来る、そんな環境を作るためにも、学校が果たす役割は大きいと実感した。

同時にブラジル人児童を日本の学校に受け入れるという事で、日本の教育システムや規律・ルール観などを日本の教師自身が見直すチャンスとなることもある。ブラジル人児童が戸惑う日本の学校における様々な文化や学校観の違いをあらたにすることで、そこから日本の教育というものをとらえなおすことも可能となってくるのではないか。

「共生」という環境を用意する国や自治体の資金面での問題もひどく重要な問題である。各自治体の予算によって、対応するための様々な取り組みの面での格差が拡大していると報告する新聞記事もある。実際に各学校を見学した際には、ブラジル人児童の持つこのような特殊性を理解し柔軟に対応しようと試みる現場の取り組みを知ることが出来た。HIRO学園を始め、豊田市や大垣市担当の先生方のひたむきな努力・熱意には感動し、このような仕事に大きな意味を見出した。

昨今は小学校における英語教育に関する論議がかまびすしいが、大垣や保見の実態が示しているのは、日本語教育の出来る教師とポルトガル語の出来る教師が切に求められているという点である。もちろん英語の出来る教師が小学校で求められていることも事実であろうが、ブラジル人児童と現場の教師がまず困っているのは、「日本語の出来ないブラジル人の児童」と「ポルトガル語の出来ない教師」が一緒になって教育を創りあげていくことの困難さである。

また国際理解教育の本来の趣旨からいっても、ある特定の文化や言語だけを重要視することによって差別や偏見（児童の側からの劣等感）が生まれる恐れもある。また、このような教育環境から生み出された「落ちこぼれ」が非行や犯罪の温床となる可能性もある。だとすれば、全ての文化・言語を対等に扱い、外国人児童に手厚い教育を施すことは治安上の観点からいっても大きな意味をもつのではないか。だからこそ移民の多い欧米では「多文化共生」「多文化教育」が叫ばれているのであろう。だとすれば、実践的蓄積に歴史の厚みを持つ、このような欧米の先進的实践から、私たちはもっと貪欲に学び、新たな試みに挑戦すべきなのではないか。これが本研究を通じて得た中間的結論である。

NOTES :

1. 参考までに、古い資料ではあるが1990年の非識字率はブラジルの東北部において最も高く36.7%で、ブラジル全体としての非識字率は17.7%である。
2. 1996年にブラジル教育法が改正され、98年2月から（新学期は2月から）新法によって学校が運営されている。これによって従来ほど落第制度は厳しくなくなったとされている。（州や学校によって対応が異なっている側面はあるが）
3. この答えについては今回の論文では目的が違ったため、調べる事が出来なかった。これから現場に出ても意識していく、私の課題である。
4. 高橋幸恵さん（一橋大学院博士後期過程）が1995年から1996年にかけて群馬県大泉町で実施した質問紙調査（回収率68.6%・サンプル数95）の結果である。
5. 内訳は瑞穂小学校13人（男子6人・女子7人）、葵が丘小学校11人（男子6人・女子5人）、芳川北小学校14人（男子6人・女子8人）、和田小学校9人（男子3人・女子6人）、開成中学校6人（男子3人・女子3人）以上男子24人・女子29人

6. HIRO学園ではブラジルの教育カリキュラムに従って授業が行われているが、「音楽」と「芸術」は特別に授業として取り入れている。
7. 今年度から愛知県のある高校では、ブラジル人生徒に対する入学試験での特別処置がとられるという。具体的には入学試験問題にひらがなのルビをふるというものである。
8. 平成14年度からは通訳の方が2人になり、代わりに以前教員をしていたらした福田先生（「日本語学級」でも教えていらした）が巡回相談員として入られる。先生はポルトガル語も話され、学生時代からポルトガル語で日本語を学ぶための教材を作成された方である。
9. 在籍していても不登校のブラジル人児童は存在しているため、このような数字になると思われる。
10. 平成13年度に入ってから、「ポルト・セグロ」という新たなブラジル人学校が大垣市に誕生している。岐阜県内では、美濃加茂市と可児市に合わせて3つのブラジル人学校がある。
11. 子どものポルトガル語学習の場として、大垣市立西小学校にある「日本語学級」の通訳の邑井先生が私的に開いていらっしゃる塾がある。通っている子どもも多いようだ。

REFERENCES:

- 池 聡子 1995 「日系ブラジル人の雇用実態とその変遷」『共同研究・デカセギ日系ブラジル人』：39-65, 明石書店
- 井桁 碧 1995 「子どもから見た日本の学校～言葉の壁と子供たちの抱える問題」『共同研究・デカセギ日系ブラジル人』：439-476, 明石書店
- 石川雅典・川原素子 1995 「日系ブラジル人の就労と生活の実態」『共同研究・デカセギ日系ブラジル人』：95-133, 明石書店
- 河村リリ 2000 『日本社会とブラジル人移民～新しい文化の創造を目指して』明石書店
- 岐阜市教育委員会・学校指導課 『外国人児童生徒の教育について』
- 岐阜市教育委員会・学校指導課 『外国人児童生徒及び帰国児童生徒』
- 岐阜県大垣市教育委員会 平成12・13年度 『外国人子女教育受入推進地域中間発表』(財)大垣国際交流協会 2001.6 2001.10 『フレンドリー』
- コバヤシ, エレナ 1995 「日本とブラジルの教育のあり方の相違」『共同研究・デカセギ日系ブラジル人』：411-436, 明石書店
- 自由人権協会 (JCLU) 編 1997 『日本で暮らす外国人の子ども達』AKASHI人権ボックス
- 総務庁統計局 1985 『第37回日本統計年鑑』日本統計協会
- 高橋幸恵 1998 「デカセギの中の子ども達」『<教育と社会>研究 第8号』
- 田中 宏 2000 『在日外国人・新版～法の壁, 心の溝～』岩波新書370
- 寺島隆吉 2000 『国際理解の歩き方～映像と音楽で学ぶ平和・人権・環境』あすなろ社
- 中西 昇・佐藤部衛 (編) 1995 『外国人児童・生徒教育への取り組み～学校共生への道～』教育出版
- 丹羽雅雄・他 1999 『第3回移住労働者と連携する全国フォーラム・東京1999・報告書』
- 丹羽雅雄 1995 『外国人労働者と人権』開放出版社
- 橋本秀一・他 1997 『外国人労働者が就業する地域における住民の意識と実態～群馬県大泉市・長野県上田市・宮城県古川市』日本労働研究機構
- 法務大臣官房司法法制部 1999年・2001年 『出入国管理統計年報』
- 村上 博 1995 『外国人労働者問題を斬る』部落問題研究所
- 渡辺雅子 1995 「出入国管理法改正とブラジル人出入国の推移」『共同研究・デカセギ日系ブラジル人』：19-32, 明石書店
- 渡辺雅子・アンジェロ=イシ 1995 「日系ブラジル人の出稼ぎの行方」『共同研究・デカセギ日系ブラジル人』：607-617, 明石書店